

ソクラテスとプラトンの世界

はじめに

さて、今回の『ソクラテスとプラトンの世界』という作品は、一つは、『ソクラテスの弁明』、第七書簡、ソクラテス賛美、歴史上のソクラテス』という作品と、もう一つは、『プラトンの世界』という作品を、いわば一つに「統合した」ものであり、その内容は、次のようなものである。

まず、『ソクラテスの弁明』では、まだ若い二十八歳のプラトンは、そのソクラテスの「裁判」に臨んで、一体、どのような心境であり、また、その「判決」やソクラテスの「刑死」後、一体、どのような心境になったのか？ それらを丁寧な考察したものであり、また、『第七書簡』では、まず、プラトンの「若い時の心境」（その「考えや想い」というのは、一体、どのようなものであり、また、プラトンにとって、師ソクラテスの「三つの難題」とは、一体、どういうものになるのか？ さらに、プラトンは、なぜ、ソクラテスを主人公（或いは登場させた）作品で後年まで押し通したのか？ それらの考察であり、そして、最後の『歴史上のソクラテス』では、実際のソクラテスという人は、一体、どのような人物であったのか？ それを『饗宴』の中の「ソクラテス賛美」の本文から読み解いたものであり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねてみてください。

一方、『無知の自覚と自然の問題』では、まず、若いソクラテスは、なぜ、「自然」の問題から「人間の探究」へと向かったのか？ その「経緯」（推移）と、また、ソクラテスの「無知の自覚」とは、一体、どのようなものであり、また、ソクラテスが愛求した「知識」とは、一体、どのようなものになるのか？ それらの考察であり、また、「アイデア論」への「六段階」では、まず、プラトンは、なぜ、「アイデア論」というものを必要とし、それを華々しく展開しなければならなかったのか？ その「推移」（つまり「アイデアの誕生」から「アイデアの発展」そして「アイデア界の完成」まで）を「六段階」に分けて丁寧に考察したものであり、そして、最後の「無知の自覚」と「アイデア論」との関係では、ソクラテスが愛求した「真知」とプラトンの「アイデア界」の「アイデア」とは、やがて「一体化」し、一つに深く重なり合うようになるという考察であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねてみてください。

令和四年十一月吉日（完成版）

如月翔悟

目次

① ソクラテスの弁明

② 第七書簡

- 一、 文章を書く
- 二、 真似ると学ぶこと
- 三、 人間を理解する方法
- 四、 実際に作品を書く
- 五、 三つの難題とイデア論
- 六、 中期から晩年まで：

③ ソクラテス賛美

歴史上の「ソクラテス」
あとがき

※ 参考文献

目次

プラトンの世界

① 無知の自覚と自然の問題

- 一、 自然から「人間探究」へ
- 二、 アリストパネスの「雲」
- 三、 徹底した「無知の自覚」
- 四、 揺るぎない「足場」

② 「イデア論」への「六段階」

- 一、 第一段階
- 二、 第二段階
- 三、 第三段階
- 四、 第四段階
- 五、 第五段階
- 六、 最終段階

③ 無知の自覚とイデア論との関係

- 一、 真知とは
- 二、 イデアとは
- 三、 魂の不死の立証
- 四、 真知とイデア
- 五、 イデア論の完成

※ 参考文献

ソクラテスの弁明、第七書簡、その他

ソクラテスの弁明

ソクラテスの弁明

まだ若い二十八歳のプラトンは、その「法廷」に居合わせて、彼の「全神経（全精神）」を傾けながら、いわゆる「師ソクラテスの弁明の一部始終」を異常な関心を持って見守っていたに違いない。しかし、それだけでは何も起こりようがないわけで、若いプラトンは、その「ソクラテスの弁明の一部始終」を何度となく「心の中」に思い浮かべながら、その内容を「反芻（吟味）」したということが最も大事な事件なのである。つまり、若いプラトンは、その裁判が終わった後も、恐らく、毎日のように、その「裁判の様子」を思い出しては、あれこれ考えたり、また、その考えたり思いついたりしたこと、あるいは特に印象に残ったソクラテスの言葉などは、時には何か「紙（パピルス）」などに記録（メモ）するようなこともあったのではないかと思う。

これは、何も特別なことではない。例えば、心から敬愛している恩師が、何らかの罪で裁判にかけられたりすれば、その「法廷」に居合わせている弟子たちは、その裁判の「最初から最後」まで異常な関心を持って見守り、そして、訴えた側（原告側）の様々な「言い分」とともに、自分の恩師の「話す内容（弁明）」の一部始終の一語一句に対しても、ものすごい注意力を払って、可能な限り、そこで話される言葉を聞きのがすまいと、精神を最大限に集中して聴き入ることになるだろう。これは、何も特別なことではなく、むしろあまりにも当然のことであり、かえって、ぼんやり聞いているほうがよほどおかしいくらいである。

しかも、そのようにして「裁判の様子の一部始終」を「心の中」（いわば脳裏）に、可能な限り、しっかりと焼きつけるようにして見聴きしていた「大きな事件」（出来事）であつてみれば、その「裁判」後も、毎日のように、その「裁判の様々な様子」が、はつきりと鮮明に思い出されてきたとしても、何も不思議なことではないだろう。

それゆえ、若いプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）には、毎日のように「裁判の様々な様子」が何度も浮かんで消えて行ったであろう。そして、その「裁判の様々な様子」が、プラトンの「心のスクリーン」にかなりはつきりと鮮明に写し出されては、その「裁判の様々な様子」について、いろいろな角度から何度ともなくあれこれ考えては、その考えたことや思いついたこと、また、特に印象に残ったソクラテスの言葉などは、恐らく、何か紙（パピルス）などに記録（メモ）をして、書き留めておくこともあったのではないかと思う。また、弟子のプラトンは、ほかの仲間たちとその「ソクラテスの裁判内容」について、いろいろと話をすることも当然あつたに違いない。これも特に不思議なこととは何もないだろう。

そのようなことが「裁判」後、毎日のように、あるいはかなり頻繁に行なわれたと見ても、それほど間違いにはならないだろう。なぜなら、まだ職業についていない、自由の身の若い二十八歳のプラトンの「頭の中」には、何よりも師ソクラテスの身の上で起きた「死刑判決」という、まったく信じられないような結果こそ、「最大の関心事」であつたであろうし、また、一体、どうしてこのような最悪の結果になってしまったのか？ そのそも何の罪もない師ソクラテスが、なぜ、どうしてこんな目に遭わなければならないのか？ その他、そのような様々な想いが、毎日のように若いプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）に次から次へと洪水のように襲ってきたとしても、何が不思議なことがあるだろう。

うか、あまりにも当然過ぎるほど当然なことである。

そして、その衝撃の「死刑判決」から約一ヶ月後、ソクラテスは、毒杯を仰いで従容として死んでいくことになる。この時、プラトンは、病気でその場に居合わせなかったが、若いプラトンの「衝撃の大きさ」は、まさに頂点に達するほどのものであったことは、容易に想像できるものである。それは、後年、『『パイドン』』という著作のなかで、ソクラテスが毒杯を仰いで死んでいく時に、そばにいた弟子たちが、耐えきれずに「泣き崩れていく場面」を鮮やかに描いているが、当時、二十八歳の若いプラトンの気持ちも、まったく「同じ心情」だったに違いない。そして、そのあまりにも「大きな衝撃」こそ（そのあまりにも「大きな衝撃」の中には、師を失った大きな悲しみや不正な裁判に対する怒り、それに加えて、政治の腐敗や人心の荒廃、その他、そのような様々な思いが複雑に錯綜していたであろうが）、そのあまりにも「大きな衝撃」こそは、その後、プラトンをして、ソクラテスを主人公とした様々な「初期作品」を書かせる大きな原動力になったことは、もう全く疑いようのないものではないかと思う。

そして、若いプラトンをして「どん底の思い」につき落としたあの「裁判の一部始終」こそは、何よりも最初に徹底的に考えてみなければならぬ最大の問題になっただろう。それゆえ、若いプラトンは、あの「裁判の様子の一部始終」を自分の「心のスクリーン」に何度も思い出しては、それを巧みな文章で再現してみるようになるわけである。そのようにして生まれたのが、いわゆる『ソクラテスの弁明』になるかと思う。もちろん、一般には、プラトンが『ソクラテスの弁明』を書いたのは、前三九三年に、ソフィストのポリュクラテスという人が、『ソクラテスの告発』という一文を発表したが、それに触発されて、あるいはそれに対抗するような形で書かれたということになっているかと思う。

しかし、ここで最も大事なことは、いわゆる『ソクラテスの弁明』が、ソクラテスの死後すぐに書かれたものではなく、死後何年か経ってから、上述の一文に対抗するような形で書かれたという「外的な事実」ではない。また、最初に書かれた作品が、『ソクラテスの弁明』だったのか、あるいはほかの作品だったのか、それとも幾つかの作品が同時進行的に書かれていたのか、それもここではそれほど大きな問題ではない。ここで最も大事なことは、ソクラテスの「裁判事件」から実際に『ソクラテスの弁明』を書くまでの数年の間、若いプラトンの「心の中」で絶えず継続して最大の「問題」となっていたものは、一体、何だったのかを問えば、それこそ、若いプラトンをして「どん底の思い」につき落としたあの「裁判の一部始終」こそは、何よりも最初に徹底的に考えてみなければならぬ最大の問題であったことは、まったく疑う余地はない。なぜなら、心から敬愛していた師ソクラテスが、こともあろうに何の罪も犯していないのに、不当な裁判の結果、死刑の判決を受け、その一ヶ月後、毒杯を仰いで死んでしまったという、この実に生々しい一連の「事件・事実」こそは、忘れようにも決して忘れることができず、毎日のようにそのことについて考えざるを得なかったであろう。

それは、「裁判」直後からすでに「胎動」（つまりその裁判の内容について、あれこれ考えてみる）が始まり、そして、約一ヶ月後、その師ソクラテスの刑死により、その「衝撃」は、まさに頂点に達するとともに、それでは、一体、なぜ、どうしてこのような最悪の結果になってしまったのか？ その真の「原因」を何が何でも解明しなければならぬ。そのためにも、若いプラトンは、あらためて「裁判内容の一部始終」（特にソクラ

テスの弁明部分)について、徹底的に考え直してみる必要性を強く感じたとともに、できるだけ「ソクラテスの弁明の一部始終」を丁寧に再現することによってこそ、ソクラテスという生きた人間の「考えや思想」(その生き方と死に方)とは、一体、どういふものであったかを真に理解できるとともに、また、ソクラテスという人間を誤解(誤って理解)しているような人たちがいるならば、実際のソクラテスとは、まさにここに書かれている通りの人間であったことを、はっきりと理解してもらいたいがためでもあっただろう。

それゆえ、プラトンの『ソクラテスの弁明』という著作は、それなりの内容で再現されているのではないかと一般に考えられてきたものである。敢えて言えば、ソクラテス自身の「肉声」にそれなりに近いものになっているのではないかということである。もちろん、プラトンは、いわゆる「速記」をとっていたわけではないので、ソクラテス自身の言葉がそのまま再現されているというのではない。もちろん、そうではない。それに加えて、実際の裁判では語られなかったことまで、いろいろと書き加えられているのではないかという指摘もあるわけであるが、たとえそうだとしても、その書かれた「内容」には、ことさらに「うそやでたらのこと」を書き並べるようなことは、それほどなかったのではないかと思う。それでは、なぜ、そうだと敢えて言えるのかと言えば、その理由の一つとしては、いわゆる『ソクラテスの弁明』という作品を気をつけて読んでもらえればすぐに分かることであるが、そのなかで、ソクラテスは、「……これからわたしが話そうとすることは、全部ほんとうのことなのだから、どうか、そのつもりで聞いてください。…」(20 p.)と、わざわざ前置きをしてから話をしているからである。それゆえ、若しもプラトンが「意図的(或いは意識的)にうそやでたらのことを書くようなこと」があれば、それこそ、ソクラテスの「話す内容」は、そのままそっくり「うそやでたらのこと」になってしまい、大変な「矛盾」が生じることになるからである。

それゆえ、本来であれば、若いプラトンが『ソクラテスの弁明』を書く上で最も注意を払うべきことは、何よりも「ソクラテスの言葉(弁明)」をできるだけ忠実に再現することであり、そうでなければ、「何よりも真実を愛し求めた師ソクラテスに対する最大の裏切り行為になる」からである。それは、例えば、まだ若いプラトンが、師ソクラテスをかばうあまりに、ソクラテスに有利のようにと「うそやでたらのこと」を書くようなことがあれば、そのような「行為(行動)」こそは、師ソクラテスが最も嫌った「行為(行動)」に他ならないからである。それゆえ、若いプラトンにとって、いわゆる「ソクラテスの言葉(弁明)」をできるだけ忠実に再現することが、いわば「何よりも大事なことになっていたのであろう」というのが、従来までの「一般的な見方」であったわけである。ところが、今日では、そのような「考え方」が大きく音を立てて崩れ始めているわけである。

そして、プラトンの『ソクラテスの弁明』という著作は、ソクラテス自身のあるがままの弁明の記述などではなく、実はいろいろと脚色がほどこされている、いわば「理想化されたソクラテス像」に過ぎないのだというのが、今日の「考え方」の主流になっているかと思う。もちろん、そのような傾向は、確かにあるわけであるが、しかし、それは、あくまでもソクラテスという人間の「本質」(つまり「真の姿」)をできるだけくつきりと浮かび上がらせるための脚色であって、決してありもしない「ソクラテス像」をでっち上げるための脚色などでは決していないことの方が、遙かに大事なことになるかと思う。もっと言えば、プラトンが考えていたことは、その当時からいろいろと誤解されていた「表

面的なソクラテス像」などではなく、むしろこの『弁明』のなかに描かれている「ソクラテス像」こそは、まさに真正正銘の真の姿の「ソクラテス像」であるというような思いで書かれたに違いなく、それゆえ、われわれは、プラトンという人間を信じてよいのではないかと思う。

それでは、なぜ、このことに執拗にこだわるのかと言えば、それは、ソクラテス自身の「言葉」（敢えて肉声）をそのまま聴くということが、幾つかの書物を除いては、ほとんどでき得ないからである。つまり、ソクラテス自身の「考えや思想」というものが、一体、どのようなものであったかは、例えば、『ソクラテスの弁明』を初めとした「幾つかの書物」の中にこそ、生き生きと語られているものだからである。

それでは、その「幾つかの書物」としては、一体、どういうものがあるのかと問えば、その代表的なものとして、やはり、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』とプラトンの『ソクラテスの弁明』や『クリトン』、その他の幾つかの初期著作ではないかと思う。もちろん、厳密には書かれたものであるから、ソクラテス自身の「肉声」そのものであるはずもないが、それでもそれなりの内容で再現されているのではないかと思う。

そして、この二人、つまり、プラトンの「ソクラテスという人間の理解方法」とクセノフォンの「ソクラテスという人間の理解方法」との相違こそは、最も興味深い「対照的なもの」になるわけである。それでは、一体、何がどのように「対照的」なのかと問われれば、それは、次のようなことである。――つまり、クセノフォンは、ソクラテスという人間を、まさに「外から見た」のに対して、一方のプラトンは、ソクラテスという人間を、むしろ「内から観た」ということである。そして、この「問題」こそは、徹底的に考えてみなければならぬものである。なぜなら、ここにこそ、プラトン哲学の「最大特徴」とともに、「最大の謎」が奥深く隠されているからである。つまり、プラトンは、なぜソクラテスを「主人公」（或いは登場）させた「作品」で後年までずっと押し通したのか？ この最大の「難題」に対して、徹底的に考えてみなければならぬ時が来たということである。

*

*

第七書簡

「第七書簡」について

それでは、プラトンは、なぜソクラテスを主人公（或いは登場）させた作品で、後年までずっと押し通したのかという、この難題について、徹底的に考えてみたいと思う。なぜなら、ここにこそ、プラトン哲学の「最大の謎」が、まさに奥深く隠されているからである。

*

*

まず、若いプラトンが、少なくとも「二〇歳はたちから二十八歳」の時まで、晩年のソクラテスと親しく「対話（吟味）活動」を積み重ねることによって、計り知れないほどの大きな影響を受けたことは間違いないが、その間、若いプラトンにとって信じられないような事件が数多く起こることになるのです。そのなかでも、三十人政権が、ソクラテスに対して、サラミスの人レオンを死刑にするために、サラミスまで行って、連れてくるようにと命令した「レオン逮捕事件」、そして、もう一つは、「……ソクラテスは、国の認める神々を認めず、別の新奇な鬼神のまつりを導入するという罪をおかし、かつまた、青年たちに有害を与えるという罪をおかしている。これは死刑に値する」という罪状で訴えられた、いわゆる「ソクラテスの裁判事件」と、その結果としての「師ソクラテスの刑死」という、まったく信じられないような事件こそ、若いプラトンにとって何とも形容のしようもないほどの「大きな衝撃」を受けたことは、間違いないことだろう。その頃の心境について、「晩年」（七十四歳）のプラトンは、その『第七書簡』のなかで次のように回想している。

*

*

「……わたしも、かつて若い日には、多くの人たちと同じような気持をもちました。自分のことが左右できるようになり次第、ただちに国家の公共事業に従事したいと、そう考えたわけです。そこへたまたまわたしの身の上に、国政のことでちよつとした偶発事が起こったのです……」。それは、「多くの人たちから非難されていた当時の国家体制」が崩壊し、それに代わって、「三十人政権」という新しい寡頭政権が誕生したということである。「……ところでたまたま、このうちの幾人かは、わたしには親戚筋や知合いにあたる者であったうえ、彼らはさつそく、わたしにうってつけだからと、自分たちの事業への参加を呼びかけてくるようになったのです。わたしが心を動かされたのも、異とするに足りません。なにぶん若かったものですから。つまり、彼らこそは、世の人々を、とかく不正の多かったこれまでの暮しぶりから正しい生活態度へと導きながら、国政を建てなおしてくれるであろうと、そう思ったわけでした、だからわたしは、彼らに対して、これから何をしようとしているのか、極力注意をはらっていたのです。……」

*

*

ここまでの引用文は、いかにも若々しい青年プラトンの、「自ら国政に参加をして、国家を少しでもよくしたいという青年らしい志（心情）が生き生きと語られている」ところである。しかし、やがて、プラトンは、次のようなきびしい現実を目のあたりまにすることになるわけである。つまり、「……そうして見ているうちに、これらの人たちは、ごく短期間に、かえって、以前の国家体制のほうが黄金時代であったことを証明する結果となつたのです。いろいろなことがあったなかでも、とくに、彼らは、こういうことをしたのです。つまり、当時の人々のなかでいちばん正しかったと言ってもおそらくわたしの恥にはならないであろう方を、——わが敬愛すべき年長の友ソクラテスを、ほかの三、四人の者

といっしょに、ある市民のところへ、これを死刑にするため強制連行してくる役目で、差し向けるなどという、そういうことをしたのです。あの方を、自分たちの行動にぜひもなく参加させんがためにです！ もっともソクラテスは、従いませんでした。神をも恐れぬ彼らの所業に荷担するよりは、むしろ危険を冒してあらゆる迫害に甘んじようとなさったのです。こうした事件の一部始終と、それに似たような、けっして軽微でない一連の事件を眼のあたりにするにつけてわたしは、憤懣ふんまんやるかたなく、当時の悪弊からきっぱりと身を退ひいたのです。……」

*

*

ここには、すでに七十四歳という晩年を迎えていながらも、今なおそのプラトンの「心の中」には、「師ソクラテスへの敬愛の情」というものが、すこしも色褪せない状態で存在していることが鮮やかに語られているとともに、プラトンの「不正を好まぬ非常にまじめな性格」などが、はっきりと表れているところでもある。やがて間もなく、その「三十人政権」は崩壊をし、それに代わって、国外に亡命していた人たちが帰国をして、新しい「政権」をつくることになる。「……するとふたたび、徐々にはありませんでしたが、とにかく公共の政治的実践への意欲が、わたしをひきつけるようになってきた。……」。しかも、その亡命から帰国した人たちのとった政策は、かなり穏健なものだったと、若いプラトンは、そう考えていたわけである。「……しかしこんども、何かのめぐり合せから、一部の権力者たちが、あの方を、わたしたちの同土ソクラテスを、まことに非道きわまる、ましてやソクラテスにはもつてのほかの罪状をおしつけて、法廷へ引っぱり出したのである。すなわち、かつて、彼ら自身が亡命の憂き目を見ていたころ、亡命中の仲間の一人が非道な仕方で逮捕されるさい、その連行に手をかすのを拒絶なさったあの方を、不敬犯とみて告発し、さらには、これに有罪の票を投じて、死刑に処するにいたったのです。

で、そういった事件や、国政にたずさわっていた者たちのことを、その法律や慣行ともども観察してしまいましたところ、たち入って考察すればするほど、そして年齢よわいを重ねれば重ねるほど、わたしには、国事を正しい意味において、司つかさどることが、いよいよ困難に思われてきたのでした。(中略)、そういうわけでわたしは、初めのうちこそ、公共の実際活動へのあふれる意欲で胸いっぱいでありましたのに、そういうことどもに思いをいたし、ものがごと支離滅裂に引きまわされているありさまを見るにおよんでは、とうとう眩暈めまいを覚えざるをえなくなったのです。そこでわたしは、まさにそういうことどもについてはもちろん、国政全体についても、どうすれば改善しうるであろうかと検討するのをやめたりはしなかったものの、しかし実際行動に出ることについては、好機を期して、ずっと控えているよりほかなかったのです。……」(「第七書簡」324b～326e)

*

*

引用が長くなったが、しかし、この引用部分は、若い時のプラトンの「心情」が実に生き生きと語られている部分であるとともに、すでに晩年になっていたプラトンが、自分の若い時をふり返って見る時には、いつもその中心には「ソクラテス」がいたということ物語っているものである。そうでなければ、当時、数多くあったであろう事件の中から、特に「ソクラテス」に関する事件を好んで選び出すわけもなく、また、そもそもソクラテスを主人公とした様々な「初期作品」を書くわけもないからである。つまり、まだ若いプラトンにとって、ソクラテスという人物は、非常に大きな存在であったとともに、そのソ

クラテスの言動には、実に様々な「魅力と謎（まだ若いプラトンには十分に理解できない部分）」とに満ち満ちていたということになるのだろう。しかも、「二〇歳はたちから二十八歳」という、まさに人間としてでき上がるうとしている「この時期」（つまり「人間形成期の後半期」）であつてみれば、間違ひなく、より「質の高い」（高質な「知的食料」）にもう飢えに飢えていたであろう若いプラトンにとつては、晩年のソクラテスと「人間（或いは人生）の諸問題」について、あれこれ親しく「対話（吟味）活動」を積み重ねることは、何よりも楽しいことだつたに違ひないことは、容易に想像できるものである。ところが、やがて、プラトン自身回想しているように、「……一部の権力者たちが、あの方を、わたしたちの同士ソクラテスを、まことに非道きわまる、ましてやソクラテスにはもつてのほかの罪状をおしつけて、法廷へ引っぱり出す。……」という、思いもかけないような事件が起こることになるのである。

*

*

その時、二十八歳であつた若いプラトンにとつて、これは、非常に「大きな衝撃」だつたに違ひない。しかも、その裁判の結果が、「死刑」というまつたく信じられないようなものであれば、なおさらのことである。そして、約一ヶ月後、ソクラテスは、毒杯を仰いで従容と死んでいくに及んでは、その「衝撃」は、まさに頂点に達したと言つてもよいのだろう。そして、まさにこの「事件」、つまり、師ソクラテスの身の上に起こつた一連の「出来事（事件）」こそは、若いプラトンの「人生の方向」を大きく変えてしまう「決定的な要因（原因）」となるものである。——つまり、裁判の「不正（不当）」はともあれ、「刑死」という形で死んで行つた師ソクラテスの弟子であつたということ、その「禍」が弟子たちにも及ぶ可能性もあつて、プラトンは、数人の仲間と一緒にアテナイを離れて、メガラに行き、そこに身をおいたと言われている。それが、いわば「外的な大きな変化」（つまり「遍歴時代」に入ること）になると同時に、一方、プラトンは、やがてソクラテスを主人公とした様々な「初期作品」を書くことになるが、それが、まさに「内的な大きな変化」となるものである。

一、文章を書く

ところで、ここでじっくりと腰を据えて考えてみなければならぬ問題は、次のようなことである。つまり、若いプラトンは、ソクラテスの「刑死」後、初めて、「ソクラテスを主人公とした作品」を書き始めることになつたのか？ それとも、ソクラテスがまだ生きていた頃から、すでに「ソクラテスを主人公とした作品」（或いは作品として完成してはいるけれども、その下書きやメモなど）を書き溜めていたのかどうか？ という問題があるかと思う。それともう一つの問題は、そもそもプラトンは、何らかの「作品」（例えば悲劇作品など）を書くというようなことがあつたのかどうか、という問題があるかと思う。これらの問題は、いろいろと複雑に絡み合つてくるので、結論から話してみたいと思う。——まず、プラトンは、恐らく、十代の頃から、すでに「文章を書く」ということは、かなり得意だつたのだろう。つまり、プラトンの「文才」（文章を巧みに書く能力）は、すでに十代の頃から始まつていたのではないかと思う。そして、或る言い伝え（それは、ディオゲネスの『哲学者列伝』によると、プラトンは、二〇歳はたちの時に、悲劇のコンクール

に参加するために、手に悲劇作品を持って、ディオニソス劇場まで出かけて行ったところ、そこでたまたま晩年のソクラテスとめぐり逢うという「運命的な出逢い」をし、そして、その晩年のソクラテスの「対話（吟味）活動」に触れるうちに、若いプラトンは、自分のいたらなさ（いわば「己れの無知」）を恥じて、その手に持っていた「悲劇作品」を焼き捨てたという逸話が残されているわけである。むろん、その「真偽」のほどはよく分からないが、しかし、若しもその逸話が本当のことだとすれば、プラトンは、ソクラテスとめぐり逢う以前は、例えば、いわば「悲劇作品」のようなものを書いていたということになるのだろう。しかし、ソクラテスとめぐり逢った以降は、そういう「悲劇作品」のようなものを書くことは、ほとんどやめてしまったということになるかと思う。

*

*

恐らく、十代の頃は、様々な「文学や芸術」などにも幅広く興味や関心を持っていたのだろう。（一説に、絵の稽古や詩も書いたとある）。やがて、ソクラテスとめぐり逢い、そして、そのソクラテスと親しく「対話（議論）」を積み重ねていくうちに、若いプラトンの気持ちは、様々な「文学や芸術」などから離れて、次第に「哲学」（「愛知学」）の方へと向かって行ったのだろう。そして、少なくとも「二〇歳から二十八歳」の八年間、より質の高い「知的食料」に飢えに飢えていたであろう若いプラトンにとって、晩年のソクラテスと「人間の諸問題」について親しく「対話（議論）」を積み重ねることは、何よりも楽しいことだったに違いない。そして、それは、ソクラテスと実際に「対話（議論）」をしている時だけではなく、例えば、プラトンが一人で行っている時にも、この前、ソクラテスと「対話（議論）」をした内容、あるいは今までにソクラテスと「対話（議論）」したことなど、つまり、今までの「ソクラテスの様々な言動」などを思い出しては、あれは、一体、どういう意味（合い）のものだったのだろうかと思いをめぐらして、独りもの想いに耽るようなことも多かったのではないかと思う。そして、そのような時に、何か思いついたことや考えたこと、あるいは特に印象に残ったり、気に入ったりした「ソクラテスの言葉」などを何か紙（パピルス）などに書き留めておくこともあったのではないかと思う。

*

*

これは、何も特別なことではない。例えば、プラトンのように非常に知的好奇心の旺盛な、しかも「文才」（文章を巧みに書く能力）にも恵まれている人であれば、なにか思いついたことや考えたこと、あるいは特に気に入っている言葉（或いは文章）などをちよつとメモっておくということがあったとしても、何も不思議なことはないだろう。恐らく、プラトンは、「二〇歳から二十八歳までの八年間」に、何か思いついたことや考えたこと、あるいは特に気に入った言葉（或いは文章）などを書き留めておくということが、まったくなかったと考えるよりは、それなりにあったと考えるほうが遙かに自然なことになるかと思う。（むろん、そのなかにはソクラテスに関することだけではなく、いろいろな分野の「書物」などを読んで、あれこれ思ったり考えたり、あるいは特に気に入った文章などを書き留めておくとか、また、当時のいろいろな知識人たちの言動などを直接、見聞きしたものである中で、特に興味や関心を持ったいろいろな言動などについて、思ったり考えたりしたことなどを書き留めておくとか、その他、そのような種々雑多なものがあるかと入り混じっていたと考えるほうが、より自然なことになるのだろう。）

つまり、プラトンは、「頭の中」（或いは「心の中」）だけに何もかもを「記憶」（保存）

していたのか？ それともプラトンの場合には、師ソクラテスの場合とは極めて対照的に、その時々思いついたことや考えたこと、あるいは特に気に入った「言葉」（文章）などを何か紙（パピルス）などに書き留めておくというところのものである。恐らく、「頭の中」だけではなく、何か紙（パピルス）などに書き留めたものもそれなりにあったのではないかと思う。とは言え、もちろん、若いプラトンが、ソクラテスがまだ生きていた頃から、すでに「ソクラテスを主人公とした作品」を書いていたのではないかと言うのではない。しかし、二十八歳までには、いつでも「ソクラテスを主人公とした作品」を書けるだけの蓄え（蓄積）は、若いプラトンの「頭の中」（或いは「心の中）」には十分に蓄え（蓄積）されていたであろうし、また、その時々にいると書き溜めたものも、それなりの量になっていたのではないかということが、ここでは特に言いたいことなのである。また、プラトンは、何歳の時から、いわゆる「初期作品」を書き始めたのかという問題が残されているが、それは、ソクラテスの刑死後、何年かを経てから（一般に、前三九五年頃）、プラトンが三十二歳の頃から、いわゆる「初期作品」を書き始めたのではないかというのが、一般的になっているかと思う。ただ、ここで最も大事なことは、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）では、ソクラテスの刑死後も、絶えず、「ソクラテスとの対話」が休みなく続けられていたということ、決して忘れてはならないということである。

*

*

それに加えて、若いプラトンが少なくとも「二〇歳はたちから二十八歳」の八年間に、晩年のソクラテスと「人間の諸問題」について親しく「対話（議論）」を何度も積み重ねていくうちに、その師ソクラテスの行なっていた「対話（吟味）活動」（すなわち「哲学的問答法」というものを自然と（或いは積極的に）身を以って「学ぶ（真似る）」ことになったとしても、何も不思議なことではないだろう。なぜなら、「学ぶこと」の第一歩は、つねに「真似る」ことから始める以外に、いかなる方法もないからである。

例えば、特に気に入っている「有名な演説や法廷弁論或いは文学作品」などを何度も「暗唱」（つまり「丸暗記」）をして覚えるということとは、当時、最も積極的に行なわれていた「学習方法」の一つであったわけである。それと同じように、若いプラトンが、ソクラテスの「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）を学ぶためには、最初はどうしてもソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」をじっくりと注意深く観察した上で、それを自分の「頭の中」で、あるいは友だちなどとの対話のなかで、そのまま「真似てみる」ことよってこそ、「……ああ、なるほど、こういう時には、こういうふうにするればよいのか」というように、その「方法」（秘訣）を身を以って学ぶ以外にかなる方法もないことである。それは、例えば、『ソクラテスの弁明』のなかにも次のような箇所が出てくるのを思い出してほしいのです。つまり、「……なおまた、そのほかに、若い者で、自分は暇もたくさんあり、家には金もたくさんあるといったような者が、何ということなしに自分たちのほうからわたしについて来て、世間の人がしらべあげられるのを興味をもつて傍聴し、しばしば自分たちでわたしの真似まねをして、そのため、他の人をしらべあげるようなことをして見ることもなつたのです。……」（『ソクラテスの弁明』23C）

二、真似ると学ぶこと

さて、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、面白いものや気に入ったものなどを「すぐに真似る」という「最大特徴」があり、そして、その「真似る」という方法によってこそ、実にいろいろなことを身を以って学ぶことにもなるわけである。だとすれば、プラトンも決して例外ではないだろう。しかも、当時、まさにより質の高い「知的食料」に飢えていたであろう若いプラトンにとって、晩年のソクラテスの「対話（吟味）活動」の巧みさは、実に魅力的に見えたに違いない。だとすれば、そのソクラテスの「対話（吟味）活動」とは、一体、どういうふうになされているのか？ その「秘密」がぜひとも知りたくなるだろう。つまり、「哲学的問答法」を行なうことができ得るのか？ その「秘密」（秘訣）がぜひとも知りたくなるだろう。これは、ありとあらゆる分野のありとあらゆる「弟子」（或いは「生徒」）たちに共通した「心理」である。——つまり、どうすれば、「師」のように「うまくなれる」（或いは「上達できる」）のか？ その「秘密」（秘訣）がぜひとも知りたくないという「学習心理」である。

そして、そのためには何度も繰り返しているように、最初はどうしてもソクラテスが実際に行なっていた様々な「対話（吟味）活動」をできるだけ注意深く観察した上で、それらをプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）でそのまま「真似てみる」（つまり「思い出し」ながら、そのソクラテスの言動を何度も「追体験」して）みて、「……ああ、こういう時には、こういうふうに議論を展開していけばよいのか」ということを理解しながら学んでみたり、また、友だちなどと何かのテーマで「対話（議論）」などを行なうような時には、ソクラテスの「対話（吟味）方法」を実際にあれこれ真似てみて、「……ああ、なるほど、こういう時にはこういうふうになればよいのか」と、身を以って実感として学ぶこともあつただろう。そして、特に気に入ったり、あるいは印象に残ったソクラテスの或る「対話（吟味）活動」などは、そのままそっくり「文章に書き写して、それを暗唱してみる」というような方法もあつたかも知れない。

*

*

恐らく、プラトンは、二〇歳はたちから二十八歳までの八年間の間に、ソクラテスの様々な「対話（吟味）活動」のなかで、特に気に入ったものや印象に残っているような「対話（吟味）活動」などは、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）に思い出しては、その「言動」をそのまま「順を追って辿ってみる」（つまり「追体験」）をしてみるだけではなく、時にはそのままそっくり（或いはその特徴をできるだけとらえて）「文章に書き写してみる」というようなことを行なつていても、それほど不思議なことにはならないだろう。そのようなことが少なくとソクラテスが生存している時から、すでに行なわれていたと考えた方が、むしろ自然なのかも知れない。また、そのような「積み重ね」がなければ、若いプラトンが、真に「内的成長」していくこともでき得なかつただろう。

もちろん、だからと言って、ソクラテスが生存している時から、すでに「ソクラテスを主人公とした作品」を書いていたというのではない。もちろん、そうではない。ただ、少なくともソクラテスが実際に行なっていた様々な「対話（吟味）活動」の中から、特に気に入ったものや印象に残ったものなどは、時には書き留めておくようなことがあつても何も不思議なことではないし、また、それを「真似た対話形式の文章」（それは、一つの

作品として書かれたものではなく、部分的に書いてみる」というようなことも、時には行なっていたかも知れない。そして、ソクラテスの刑死後、それらに手を加えて、一つの「作品」にするようなことがあったのかどうか？ その辺のところはまったく分からない。

*

*

さて、師ソクラテスの場合には、そのほとんどすべてが彼の「頭の中」（或いは「心の中」）だけに蓄え（蓄積）されていたのに対して、プラトンの場合には、一生涯、「ものを書く」ということをやめなかった人である。そして、ものを書くためには、あれこれ考えたことや調べたことなどを何か紙（パピルス）などに書き留めておくことが、どうしても必要不可欠になってくるだろう。恐らく、プラトンは、十代の頃からすでに何らかの「文章（やメモ）を書く」ということを行なっていたと同時に、その時々には思ったり考えたりしたこと、また、何か気に入った言葉（或いは文章）などを何か（パピルス）などに書き留めておくということも行なっていたのだろう。というのも、「ソクラテスの刑死」から何年か後、生まれて初めて「文章（或いは作品）」を書くというのでは、例えば『ソクラテスの弁明』などはあまりに巧み過ぎるし、また、その他の数多くの「初期作品」を書き続けることもでき得なかっただろう。確かにプラトンは、「書かれたもの（書物）」に対しては、それほどの価値を置いてはいなかったが、しかし、本当のことを言えば、「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書き続けたことが、若いプラトンをして、やがては真の「哲学者」に育て上げた最大の要因となるものである。なぜなら、「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書き続けたということは、取りも直さず、プラトンは、自分の「頭の中」（或いは「心の中」）に「生前のソクラテス」を思い浮かべては、あらためてソクラテスが行なっていた「対話（吟味）活動」の実に様々な人間の諸問題に関する「内容」等を、もう一度、徹底的に「吟味・検討」し直すこととなり、その結果として、若いプラトンは、やがて「内的成長（成熟）」を遂げては、師ソクラテスと同じような、まさに真の「哲学者」になることができ得たということである。

*

*

そして、ソクラテスの刑死から数年後、プラトンが最初に書き始めた作品が何であったかは、よく分からない。しかし、やがて『ソクラテスの弁明』が書かれることになる。それは、前三九三年に、ソフィストのポリュクラテスという人が、『ソクラテスの告発』という一文を発表することになるが、それに触発されて、あるいはそれに対抗するような形で書かれたということになっている。その真偽はともかく、当時のプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）に実に生々しく残っていたのは、まさにそのことだっただろう。つまり、何よりも若いプラトンの「頭の中」にあったものは、なぜ、どうしてこのような最悪な結果になってしまったのか！ という想いで一杯だったに違いない。——つまり、もともと何の罪もない師ソクラテスが、なぜ、どうして「有罪」（しかも死刑）などという全く信じられないような不当な判決を受けなければならぬことになってしまったのか。そもそもあの「ソクラテスの裁判」自体、一体、何だったのか？（或いはどういうことだったのか？）、あらためてあの「ソクラテスの裁判の一部始終」（特に「ソクラテスの弁明」部分）こそ、最初に徹底的に考えてみなければならぬ「最大の問題」となっていただろう。なぜなら、そこにこそ、師ソクラテスを死刑という最悪の結果へと導いた直接の要因があつたに違いないとともに、ソクラテスという人間の「生き方・死に方」の「最大

の謎」(つまり、「その核心部分」)が、そこにこそ(つまり、「ソクラテスの弁明」の中にこそ)、隠されているに違いないという、「想い」に襲われていたということである。

*

*

それゆえ、その「最大の問題」を考えるためには、あの「ソクラテスの裁判」(特に「ソクラテスの弁明」部分)こそは、できるだけ丁寧に再現してみなければならぬ。なぜなら、そうすることによってこそ、初めて、ソクラテスという人間の「考えや思想」(その生き死に)というものを真に理解できることになるとともに、なぜ、どうしてあのような「最悪の結果」(つまり「死刑」)という判決になってしまったかという原因もわかるだろう。また、ソクラテスという人間を誤解しているような人たちがいるならば、実際のソクラテスとは、まさにここに書かれている通りの人間であったということを「弁護」(証明)しようとするためでもあったわけである。

それゆえ、若いプラトンが、ソクラテスの刑死後、初期に書き始めた作品が、まさに『ソクラテスの弁明』であったことは、間違いないだろうし、また、その作品の「書き方」が、「ソクラテスを主人公とした作品」になったとしても、それは、あまりにも当然すぎるほど当然のことである。そして、その他の作品も、「ソクラテスを主人公とした対話形式の作品」になって行ったのは、一体、なぜかと問えば、それは、まさに次のような理由からなるのだろう。——つまり、プラトンは、できるだけ生前のソクラテスが実際に行なっていた、あの「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」)そのものを、できるだけ生き生きと再現したかったのと同時に、そうすることによってこそ、ソクラテスという人間の「考えや思想」(その生き死に)というものもほんとうに深く理解でき得るだろうと考えたからであろう。というのも、まだ若いプラトンにとって、やはり師ソクラテスという人間の「言動」には、実に様々な「魅力と謎」(若いプラトンにはまだ十分に理解できない部分)とに満ち満ちていたのであるから、その様々な「魅力と謎の部分」とを中途半端ではなく、徹底的に「解明」(理解)したいと心の底からそう願ったとしても、何も不思議なことではないということである。

そして、そのような理由から、「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書くということが、若いプラトンをして、やがて、真の「哲学者」に育て上げる最大の要因となるものである。つまり、「ソクラテスが刑死」した二十八歳の時点では、まだプラトンは、真の「哲学者」ではなかったということである。——それでは、いわゆる「ソクラテスを主人公とした様々な対話形式の作品」を書くためには、プラトンは、一体、具体的にはどういうことをしなければならなかったかについて考えてみたいと思う。なぜなら、ここにこそ、プラトン哲学の「最大の謎」(秘密)が奥深く隠されているからである。

三、人間を理解する方法

それでは、いよいよ「本題」(核心部分)に入っていくたいと思うが、それは、次のようなことである。——つまり、われわれ人間が、まさに「人間というものを理解する方法」には、大きく分けて、次のような「二つの方法」があるということである。——すなわち、一つは、「ある人間を外から観察するという方法」であり、そして、もう一つは、「ある人間を内から観察するという方法」である。そして、プラトンが採用した「ソクラテスと

「ソクラテス」といふ人間を内から観るといふ方法」であり、そして、もう一方のクセノフォンが採用した「ソクラテス」といふ人間を理解する方法」は、まさに「ソクラテス」といふ人間を外から見るといふ方法」である。

それでは、その「二つの方法」の、一体、どこがどのように違うのかと問えば、それは、次のようなところである。まず、クセノフォンが採用した「ソクラテス」といふ人間を外から見るという方法」であるが、この方法は、われわれ人間が、最も一般的に行なっている方法である。つまり、ソクラテスという人間をいろいろな角度から注意深く観察して、その特徴をまずつかむという方法である。——例えば、身体の場合であれば、まず、その人の全体の「容姿・容貌」がどうかを確かめてから、だんだんと「細かな部分（細部）」へと観察を深めていくことになるかと思う。そして、例えば、立ったり、坐ったりしている時の特徴、また、歩いたり、何か活動をしている時の特徴や、人と話している時の特徴、あるいは「喜怒哀楽」が表われた時の特徴、また、その人が身にまとう衣服類や髪型、さらに様々な持ち物類、その他、そういうものは、すべて「感覚」を通して、いくらでもとらえることができ得るものばかりである。それゆえ、健全な「感覚」を持ち合わせていれば、ふつう誰にでも、その人が望むだけいくらでも細部にいたるまで徹底して観察することができ得るものである。

*

*

それでは、その人の「精神部分」を理解するために、われわれ人間が最も拠り所とするものは、一体、何かと問えば、それは、何と言っても、その人の「口」から発せられる「言葉」（声）と、それに必ず付随するであろう「顔の表情やしぐさ」などができるだけ注意深く「観察」（分析）することによってこそ、その人の「考えや性格あるいは人間性その他」といふものを理解しようとするものである。もちろん、その人が「書いたもの」などを読んで、その人の「考えや人間性」などを理解するような場合も当然あるのだろう。

そのように、われわれ人間が「ある人間を理解するために行なう」ことは、まず最初は、「外からの観察」から始めることになるわけだ。そして、その「外からの観察」というのは、ふつうわれわれ人間の「諸感覚」を通して、とらえることができ得るものである。例えば、その人の「身体的特徴」、その時々「顔の表情やしぐさ」、また、どのような「活動や行動」をしているのか、つまり、その人の「仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他」などの詳細な観察、また、その人の「口」から発せられる「言葉」（声）やその人の「書いたもの」、それに加えて、その人が所有したり、愛用したりしているもの、さらに、その人の「……生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」、そういう「外からとらえることができるもの」を、まさにできるだけ詳しく「観察（調査）分析」することによってこそ、その人の「考えや性格あるいは人間性やその他」、つまり、その人の「内的世界」といふものを、できるだけ詳細に理解しようとする方法である。

そして、その「外からの観察」というのは、できるだけあらゆる角度から徹底的に行なわれた正確かつ詳細で、しかも、その量は、多ければ多いほどよいということになるのだろう。そして、それらの信用に足る数多くの「資料」（材料）をもとにして、例えば、「ソクラテス」といふ人間をできるだけ正確に理解しようとするものである。そして、これが、われわれが一般的に行なっている「人間理解方法」であるが、クセノフォンの場合にも、「ソクラテス」といふ人間の様々な言動」の蓄え（蓄積）を踏まえて、ソクラテスという人

間をあれこれ様々な角度から分析して、理解するという方法を採用しているわけである。

むしろ、それと同時に、クセノフォンの場合には、ソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」をできるだけ忠実に再現している（つまりできるだけ正確に真似ている）点では、プラトンと同じように、「ソクラテスという人間を内から観る」という方法も、一応は採用しているのである。それは、ソクラテスという人間の中にかなり深く溶け込んで、ソクラテスという人間の「思考（思索）活動」をそれなりにわが身に感じて、実感として理解していることになる。それでは、プラトンとクセノフォンとの「決定的な違い」は、一体、どこにあるのかと問われれば、それは、次のような「二点」なのである。

*

*

つまり、プラトンは、ソクラテスという人間と可能な限り「一体化」して、長年（つまり何年も何十年ものあいだ）、ずっと継続して、その「内的世界」（特にソクラテスの「思惟界」）を徹底的に生きてみるというところを行なっているのに対して、クセノフオンの場合には、ソクラテスという人間の中にかなり深く溶け込んではいないが、しかし、長年（つまり何年も何十年ものあいだ）、ソクラテスという人間と「一体化」して、ずっとその「内的世界」（特に「思惟界」）を徹底的に生きてみるというところは、行なっていないということである。それに加えて、クセノフオンの「基本的なソクラテスという人間の理解方法」は、こちら側にクセノフォンがいて、向こう側にソクラテスがいるという「相対的な関係」であるのに対して、プラトンの場合には、ソクラテスという人間のなかにプラトンがどこまでも深く溶け込んで、そのソクラテスと可能な限り「一体化している」という、まさに「一心同体的な関係」にあるということである。

そして、そのような「方法」こそ、つまり、プラトンのように、長年（つまり何年も何十年ものあいだ）、ソクラテスという人間と「一体化」して、ずっとその「内的世界」（特にソクラテスの「思惟界」）を徹底的に生きてみるということを行なってみなければ、ソクラテスという人間の最も奥深くに内在していたであろう「中心核」までは、なかなか辿り着けない（或いは見えてこない）ということである。そして、その人間の最も奥深くに内在しているであろう「中心核」まで辿り着けなければ、その人間をほんとうに深く理解し得たことにはならないだろう。なぜなら、そこからこそ、その人自身の「言葉」（「考えや思想」）というものが生み出される、まさに「源泉」そのものになるからである。

もちろん、ソクラテスという生きた人間を「外から観察」して知る方法も、決して軽く見てはいけない。いや、軽く見てはいけないどころか、最初は、誰だって「外からの観察」から入るしかないのである。そして、もしもその「外からの観察」が不十分であれば、当然、「内からの観察」も不十分にならざるを得ないものである。それゆえ、「外からの観察」は、できる限り（或いは可能な限り）、あらゆる角度から徹底的に行なわれなければならないことは、言うまでもない。ただ、それだけでは不十分だということである。

*

*

一方、プラトンは、少なくとも「二〇歳はたちから二十八歳」の八年間に蓄え（蓄積）したであろう、ソクラテスという人間のかなり膨大な量の「言動」をもとにして、ソクラテスという人間の中に深く溶け込んで、可能な限り、そのソクラテスという人間と一体化（つまり一つ）になり、そして、プラトン自身、まさにソクラテスとなって、その「内的世界」を徹底的に生きてみるという方法であり、そのためには、ソクラテスが実際に行なつてい

た「対話（吟味）活動」（つまり、「哲学的問答法」を、「そのままそっくり真似てみる」（つまり、「追体験」）して、みることによつてのみ、ソクラテスという人間の「思考（思索）活動」そのものを、わが身に感じて、実感として理解でき得るといふ理解方法を採用したといふことである。——つまり、プラトンは、長年に渡つて、「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書くという行為によつて、プラトン自身、ソクラテスという人間になりきつて、そのソクラテスという人間の「内的世界」（特に「思惟活動」部分）を徹底的に生きてみると、若い時にはまだ十分に理解できなかったであろう、ソクラテスという人間の様々な「言動」のほんとうの「意味合い」が、だんだんとわが身に感じて、「……ああ、なるほど、あれはこういうことだったのか！」と、実感として分かるようなことが非常に多くなつてきたに違いない。——それは、例えば、ソクラテスが人間にとつて最も「大事なことから」として考えていた「美にして善なるもの」といふ言葉の真意も、若い時にはまだ十分に理解できていなかっただろうが、長年、ソクラテスとなつて、その「内的世界」を徹底的に生きてみるといふ無限の積み重ねの結果として、自ずと（或いは「思いもかけないような感じ」）で「見えてきたもの」（こそは、まさに「美のアイデア」や「善のアイデア」といふ「考え方」（「思想」）であつたと言つてもよいのだろう。

そして、それは、取りも直さず、プラトン自身、「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書き続けることによつてこそ、だんだんと「内的成長」（或いは「内的成熟」）を遂げることとなり、その結果として、まだ若かつたプラトンは、やがて師ソクラテスと同じような真の「哲学者」に「成長（成熟）」することができ得たことである。逆に言えば、もし「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書き続けなかつたならば、プラトンは、恐らく、われわれが今日知るような「哲学者・プラトン」にはなり得なかつたかも知れない。また、ソクラテスがいつも口ぐせのように言つていた「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）も、プラトン自身、長年、ソクラテスになりきつて、その「内的世界」（特にソクラテスの「思惟界」）を徹底的に生きてみるということによつてこそ、初めて、思いもかけないような感じで「見えてきた」に違いない、その「プラトン哲学」の最高峰とも呼ばれる、あの「美のアイデア」や「善のアイデア」といふ思想（考え方）も、あるいは生み出され得なかつたかも知れないのである。

*

*

ここは、極めて大事なところであり、われわれの「一般的な考え方」では、プラトンは、自分の「考えや思想」を語る上で、ソクラテスという人間をうまく利用した、あるいはプラトンは、作中のソクラテスという登場人物に自分の「考えや思想」を語らせ、プラトン自身は、その背後に身を隠した、という印象を与えているだろう。しかし、それは、プラトンにしてみれば、「……とんでもない誤解であり、それは、まったく逆なのだ」と、どこまでも強く反論するだろう。なぜなら、ソクラテスが刑死した時、まだ二十八歳であつたプラトンにとつて、ソクラテスが実際に行なつていた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）の何たるかは、まだ十分に理解できていなかったであろうし、また、ソクラテスがいつも口ぐせのように言つていた「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）についても、まだ十分に理解できていなかったに違いない。

それでは、プラトンは、どうしてそれらのものをほんとうにわが身に感じて実感として理解できるようになつたかと言えば、それこそ、まさに長年、「ソクラテスを主人公とし

た様々な作品」を書き続けていくうちに、それは、すなわち、プラトン自身、長年、ソクラテスとなって、その「内的世界」を徹底的に生きてみるということを実際に行なうことよってこそ、初めて、「見えてきたもの」であり、それゆえ、若しもプラトンが、ソクラテスという人間になりきって、その「内的世界」を徹底的に生きてみるという方法を採用しなかったならば、恐らくは「見えてはこなかったもの」に違いないのです。

*

*

それに加えて、われわれが決して忘れてはならない最大の要点は、そもそも「善美の問題」というのは、いわゆる「ソクラテスの問題」であり、それゆえ、もともと「プラトン自身の問題」ではなく、プラトン自身の「最大の問題（関心事）」は、むしろ、「国家」（つまり「理想国家」）の方にこそあるのである。——つまり、プラトンにしてみれば、師ソクラテスが、人間にとつて最も大事なものの（或いは「最も大切なもの」としていつも考えていた「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）、それこそ、まさにソクラテスという人間の魂の最も奥深くに内在して「中心核」となっていたに違いないものを中途半端ではなく、徹底的に「説明」（理解）しようとして、長年、ソクラテスとなつて、その「内的世界」（つまりソクラテスの「魂の中」）を徹底的に生きてみることによつてこそ、初めて、その魂の最も奥深いところにあつたものが、終に「見えてきた」ということであり、それゆえ、クセノフオンのような「ソクラテスという人間を外から見るといふ方法」だけでは、どうしても（或いは永遠に）「見えてはこないもの」なのである。——つまり、プラトン自身、もう自分がソクラテスなのか、それともプラトンなのか、あるいはどこまでがソクラテスでどこからがプラトンなのか自分でももうよく分からなくなるようなところまで、それこそ、まさに、「一体化の極致」（それは「人間理解の極致」でもあるが、そこまで、何年も何十年もかけて、ソクラテスという人間になりきつて、その「内的世界」（特に「ソクラテスの「思惟界」）を徹底的に生きてみることによつてこそ、初めて、「見えて来たもの」である、ということである。

*

*

これは、何も特別なことではない。例えば、伊藤仁斎という人は、「孔子」という人間を真ほんとうに深く理解しようとして、『論語』や『孟子』という書物を、もう毎日、「之を口にして絶たず、之を手にしておかず」というように、長年（つまり何年も何十年もかけて）、徹底的に深く読んだというのも、全く同じことであり、それは、何のことはない、伊藤仁斎は、「孔子」という人間の「魂」そのもの（その最も奥深いところに内在していたであろう「中心核」とほんとうに「一体化する」（つまり、「孔子の心」は「自分の心」、「自分の心」は「孔子の心」となる）までに、何十年もかかったということであり、そこまでいかなければ、或いはそこまでいけば、まさに「……其の譬咳けいこを承くるが如く、其の肺腑を視るが如く、真に、手の舞ひ、足の踏むことを知らず」といふような、いわば「人間理解の極致」まで到達でき得るとともに、そこまで辿り着かなければ、「孔子」という人間の「魂の鼓動」が、そのままそっくりわが身に感じて、実感として聞こえて来ないだろうし、また、「孔子」という人間をほんとうに理解でき得たとは言えないということである。

そして、そのような「方法」こそ【つまり、孔子という人間の「口」から出てきた様々な「言葉」を唯一の手がかりとして、孔子という人間の「頭の中」（或いは「心の中」）に深く入り込んで、何年も何十年もかけて、その中に流れている孔子という人間の「思

考の大河」を理解しながら遡り、そして、それらの「言葉（考えや思想）」などがまさに生まれ出づるその「源（源泉）」、それは、つまり、孔子という人間の「思惟母体」そのもの、のところで辿り着いては、それと一体となり、わが身を以って、その孔子の「思惟母体」そのものを徹底的に生きてみることによってこそ、孔子という人間の「魂」そのものを、わが身に感じて、実感として理解するという方法こそ、われわれ人間が、生きた人間をそのままそっくり理解でき得る「唯一絶対の方法」であるということである。

四、実際に作品を書く

それでは、もっと具体的に話をしてみたいと思うが、まず、プラトンが「ソクラテスを主人公とした様々な作品」を書こうと机に向かっている時には、いつもプラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）では、「生前のソクラテスの姿（言動）」を想い出していることになるだろう。そうでなければ、「ソクラテスを主人公とした作品」を書くことはでき得ないからである。しかも、ただ単に「想い出」しているだけではないだろう。——つまり、「ソクラテスを主人公とした作品」を書くということは、取りも直さず、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）に蓄え（蓄積）されていたであろう、かなり膨大な量の「ソクラテスの言動」を、そのたびごとに「想い出」しては、その「想い出」したいろいろな「ソクラテスの言動」を、もう一度、あれこれ「吟味」（検討）し直して、その「ソクラテスの言動」の意味を新たに「理解し直す」（或いは「理解を深めていく」ということを自然と行なっていたことになるだろう。そうでなければ、ある「テーマ」を持った「ソクラテスを主人公とした作品」を書き上げることができ得ないからである。しかも、プラトンの場合、かなり後年まで、「ソクラテスを主人公とした（或いは登場させた）様々な作品」を書き続けたわけであるから、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）に蓄え（蓄積）されていたであろう、かなり膨大な量の「ソクラテスの言動」のほとんどすべてを、プラトンは、一度は「想い出」しては、その「ソクラテスの言動」の意味を新たに「理解し直す」ということを自然と行なっていたことになるだろう。

そして、プラトン自身よく考えてみて、どうでもいいような言動、あるいはそれほど重要だと思えないような言動などは、必要がなければ、自然ときり捨てられていったであろうし、また、重要だと思われるもの、或いは、よく理解できないような言動などは、何度も「想い出」しては、繰り返し厳密に「吟味」（検討）し直したであろう。そして、「……ああ、そうか！ あれはこういう意味だったのか！」と、初めて理解できるようになることも、非常に数多くあったに違いない。それは、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）だけであれこれ考えている時の場合もあれば、また、作品を書きながらふと想い至るといふような場合もあったであろう。そして、そういうことの「積み重ね」こそは、プラトンの「内的世界」を真に「成長（成熟）」させた最大の要因となるものである。

*

*

ところで、クセノフォンの『ソクラテスの想い出』という著作のなかには、次のような記述が出てくる。つまり、「……彼自身（ソクラテス）はいつも人間のことを問題とし、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、

政府とは何か、統治者とは何か、その他こういう題目を論じ、そしてこれらを知る者は君子人であり、知らぬ者はまさに奴隸者と呼ばれても致し方ないものと考えた。……」(1, 16)と。しかも、ソクラテスは、そのような「題目」で、年がら年中、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていたわけである。一方、まだ若かったプラトンは、少なくとも八年間の間に、そのような「題目」で、ソクラテスと直接親しく「対話(吟味)活動」を行なうようなこともあっただろうし、また、ほかの人たちがそのような「題目」で、ソクラテスと親しく「対話(吟味)活動」を行なっているのを直接「見聞きする」ようなことも、当然のことながら、多かつたかと思う。

そして、「ソクラテスの刑死」から数年後、プラトンは、『ソクラテスの弁明』という作品を書くことになるが、この「作品」などは、実際にあった「裁判の内容」(その中での『ソクラテスの弁明』部分)をそれなりに丁寧に再現しようと思つて、書かれたものになるのだろう。しかし、それ以外の多くの「作品」は、次のような「作品の書き方」になつていのではないかと思う。——つまり、プラトンは、作品を書く場合には、まず、どのような「テーマ」で書くのか? 恐らく、その「テーマ(題目)」を決めることから始めたのだろう。そして、少なくとも「八年間」の間に蓄積されたかなり膨大な量の「ソクラテスの様々な言動」の中から、その「テーマ(題目)」で語られていたものをできるだけすべて想い出しては、それらを十分に「吟味(検討)」し直した上で、作品の中に使えそうなものを数多く選び出しては、それらをプラトンの「頭の中」(或いは「心の中」)で巧みに再構成し、新たに「一つの作品」として創り上げたということである。

それゆえ、プラトンは、できるだけ「生前のソクラテスの言動(その意味内容)」からあまり離れないように注意を払いながらも、プラトンが「頭の中」(或いは「心の中」)でイメージするような「作品」に創り上げたことになるのだろう。つまり、プラトンのような「作品の書き方」は、極めて珍しい「書き方」であり、ふつうであれば、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』のように、実際にあった「ソクラテスの言動」をできるだけ忠実に再現しようとするものである。それは、例えば、「論語」であれば、「孔子の言葉」を、また、『新約聖書』であれば、「イエス・キリストの言動」を、また、『ゲーテとの対話』であれば、まさに「ゲーテの言動」を、できるだけ忠実に再現しようとするものである。そして、そのような「書き方」こそは、ふつう一般的な「書き方」であるとともに、それぞれの人物の「言動」をできるだけそのまま忠実に再現でき得る方法になるかと思う。

*

*

それでは、プラトンは、なぜ、あのような極めて珍しい「書き方」をしたのだろうか。それは、プラトンは、ただ単に「ソクラテスの言動」をあるがままに再現することに最重点を置いた人ではなかったからである。もしプラトンが、その時々の「ソクラテスの言動」をあったがままに忠実に再現しようと思えば、プラトンほどの恵まれた「文才」をもつてすれば、すぐにでもまたいくらでもでき得ただろう。それは、例えば、『ソクラテスの弁明』などを見れば、すぐに分かることである。しかし、プラトンは、そのような「書き方」は、その後の作品ではあまり行なっていないのは、なぜなのか。それは、ほかでもない、プラトンは、「ソクラテスを主人公とした作品」を書くという実際の行為によつて、もう一度、それぞれの「テーマ(題目)」を一つ一つ「生前のソクラテスの言動」にそつて考えてみようとしたのと同時に、それは、そのまま「生前のソクラテスの様々な言動の意味

すると「ころ」を、もう一度、厳密に「吟味（検討）」し直し、そして、「ソクラテスという人間」を、その「根本」（根源）から、わが身感じて、実感として理解しようとしたがゆえに、あのような人類史上ほとんど例のない「書き方」、つまり、かなり後年まで、ソクラテスという人間になりきって、その「内的世界」（特に「思惟界」）を徹底的に生きてみるという方法になったということである。

つまり、プラトンは、それぞれの「テーマ（題目）」について考えてみたいという「真理探究」の欲求と、ソクラテスという実に様々な「魅力と謎（まだ十分に理解できていない部分）」とに満ち満ちていた人間を徹底的に解明（理解）したいという欲求、この「二つの欲求」を同時に行なってしまったということである。そして、四〇歳未満までに書かれた様々な「初期作品」は、できるだけ「生前のソクラテスの言動」をもとにして、それからあまり離れないように細心の注意を払いながらも、一つ一つの「テーマ（題目）」を持った様々な「初期作品」に創り上げたことになるわけである。そして、そのような方法で、プラトン自身、何年もソクラテスになりきって、その「内的世界」（特に「思惟界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、プラトン自身、いわゆる「内的成長（成熟）」を遂げる最大の要因となったと同時に、ソクラテスという人間の「最も奥深いところに内在していたであろうその中心核」が、自ずと（或いは思いもかけないような感じで）「見えてきた」ということにもなるのである。

五、三つの難題とイデア論

さて、まだ若いプラトンには、様々な「ソクラテスの言動」のなかでどうしても（或いはなかなか）理解でき得なかった「最大の難題」が三つあったのである。それは、一体、何かと問えば、それこそ、ソクラテスがいつも口ぐせのように言っていた、人間にとつて最も大事なものの（或いは最も大切なもの）としての「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）が、まず一つあるかと思う。そして、その次の大きな難題は、いわゆる「ソクラテスという人間の（生き方をも含めた）死に方」である。それに加えて、もう一つの大きな難題は、そもそも生前のソクラテスが実際に行なっていたあの「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）とは、一体、何だったのかという問題である。

*

*

そして、プラトンは、この「三つの難題」（それは「ソクラテスに関する三大難問」）を徹底的に「解明（理解）」しなければ、ソクラテスという人間を真に深く理解したことにはならないという「想い」に、長い間、襲われていたことは、容易に想像できるものである。そこで、プラトンは、「ソクラテスを主人公とした様々な初期作品」を書くことによって、十分に「内的成長（成熟）」してきたところで、本格的に、その「三つの難題」（それは「ソクラテスに関する三大難問」）を中途半端ではなく、徹底的に「解明（理解）」しようとして（つまり「それらの難題に決着をつけるために」）、プラトンは、いわゆる「中期著作」である『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』という著作を書き上げることになるのである。

さて、プラトンは、それらの「中期著作」のなかで、あまりにも有名な「イデア論」というものを華々しく展開することになるが、それでは、プラトンは、なぜ、「イデア論」

というものを必要としたのだろうか？ それこそ、まさに「三つの難題」（それは「ソクラテスに関する三大難問」）を徹底的に「解明（理解）」するためであったということである。

*

*

ところで、プラトンという人は、恐らく、若い時から知的好奇心が非常に旺盛だったであろうから、いろいろな「知識人」たちと実際に会って親しく「対話（議論）」を交わすようこともあったであろうし、また、できるだけ数多くの「書物」から、いろいろ新しい「知識」（考えや思想）などもどんどん積極的に吸収していたであろう。もちろん、それと同時に、プラトンは、「ソクラテスを主人公とする様々な初期作品」を書くことによって、長年、ソクラテスになりきって、その「内的世界」（特に「思惟界」）を徹底的に生きてみるという、そのようなことを合わせて行なうという相乗作用によって、著しく「内的成長（成熟）」を遂げてきたプラトンは、何よりも師ソクラテスの「考え方」を「基調（基盤）」としながらも、例えば、ピュタゴラス学派やパルメニデスあるいはその他の考え方などから「ヒント」（着想）を得て、いわゆる「イデア論」というものを考え出し、そして、その「イデア論」というものを用いて、次のような「三つの難題」を一挙に「解決（説明）」することになるのである。——その一つは、ソクラテスがいつも口ぐせのようになんて言っていた、人間にとって最も大事なものの（或いは大切なもの）としての「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）を、まさに「根本（根源）」から「解明（解決）」すること。そして、その次は、いわゆる「魂の不死」を証明することによって、ソクラテスという人間の「生と死」を「解明（理解）」すること。そして、もう一つは、生前のソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」というものを、厳密に「定義する」ことによってこそ、真の「哲学」（愛知学）というものを、他の学問からはっきりと区別して、まさに「確立する」ことであつたわけである。

*

*

つまり、「……国事も、個人生活も、およそその正しいありようというものは、哲学からでなくしては見定められるものでないと、正しい意味での哲学をたたえながら……」という言葉があるように、まず、「正しい意味での哲学」（つまり真の「哲学」《愛知学》）というものは、一体、どういうものであるかを説明する必要があつたとともに、これは、もちろん、「ソクラテスの問題」（ソクラテス自身は、それを「君子の道」とも「帝王学」とも呼んでいたもの）であるが、それ以上に「プラトン自身の最大の問題」であつた、いわゆる「国家論」（特にプラトンの場合は「理想国家」というものを考える上で、どうしても真の「哲学者」（愛知者）というものを、はっきりと定義しておかなければならなかつた。なぜなら、その真の「哲学者」（愛知者）こそは、まさに一国の「統治者」となつて国家を治めることになるからである。それゆえ、その真の「哲学者」（愛知者）というものを、はっきりと定義しておく必要があつたということである。というのも、中途半端な「哲学者」（愛知者）などが政治を担当したところで、政治がよくなるはずもないからである。そこで、プラトンは、その真の「哲学者」（愛知者）というものを、いわゆる「イデア論」というものを用いて、次のように定義することになるのである。すなわち、「……哲学者とは、つねに恒常不変のあり方を保つもの（イデア）に触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに変転する雑多な

事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない……。」と。〔国家〕484b)

* *
次に、「魂の不死」の問題であるが、この問題は、プラトンにとつては、そもそも「ソクラテスの刑死」という、まさに生々しい現実の「大きな衝撃」から生じてきた問題である。しかも、ソクラテス自身、その『弁明』のなかで言い遺した、「……しかしながら諸君にも、裁判官諸君、死というものに対して善い希望をもってもらわなければなりません。そして善き人には、生きているときも、死んでからも、悪しきことは一つもないのであって、その人は、何に取り組んでいても、神々の配慮を受けないということはないのだという、この一事を、真実のこととして、心にとめておいてもらわなければなりません。……」(41cd)という、この言葉は、すなわち、「魂の不死」(つまり「死後の世界」)が存在するということを「立証(証明)」しなければ、ソクラテスの「生死」【つまり、生前は、子供の頃から、例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」)というものを頻繁に受けていたということ、また、他人から不正を受けても、自ら不正を行なうということをしなかったということ、さらに無実の罪で、しかも、その気になれば、軽い刑(恐らくは「国外追放」程度)になったのに、また、牢獄から抜け出て、国外に逃亡することも容易にできたにもかかわらず、結局は、毒杯を仰いで従容として死んでいったソクラテスの死】というものは、まったく理解できないことになるだろう。それゆえ、「魂の不死」というものを「立証(証明)」することが、どうしても「必要(不可欠)」になって来たということである。そこで、プラトンは、「魂の不死の問題」については、オルペウス教やピュタゴラス学派の「考え方」などを積極的に「採用(導入)」して、いわゆる「あの世」(死後の世界)について、徹底的に考えてみることにするということである。

* *
もちろん、この問題は、『パイドン』という著作のなかで展開されることになるが、それでは、なぜ、『パイドン』という著作のなかで「魂の不死」が語られるのかと問えば、それは、言うまでもなく、ソクラテスがまさに毒杯を仰いで死んでいくこの時以外に、人間の「死」という問題を徹底的に「対話(議論)」する最高の場面など、どこにもないからである。そして、その『パイドン』という著作を順を追って丁寧に読んでもらえば、すぐに理解してもらえらることであるが、いわゆる「魂の不死」を証明するために「幾つかの説明」がなされていくわけだが、それらだけではどうしても不十分なのである。そこで、プラトンは、まさに「最後の切り札」的なものとして、いわゆる「イデア論」というものを持ち出すことになるのである。つまり、「魂の不死」というものを「証明(説明)」するためには、どうしても「イデア論」というものが必要不可欠であったということである。それでは、なぜ、「魂の不死」というものを「証明(説明)」するために、いわゆる「イデア論」というものが必要不可欠であるのかと問えば、それは、まさに次のような非常にはっきりとした理由からである。つまり、「……肉体が減びたあと、その減びた肉体から、魂だけが抜け出し、その抜け出した魂だけで、単独で生き続けるためには、どうしても『単独で独立した不変不滅の存在(イデア)』というものを想定しなければ、いわゆる『魂の不死』というものを『立証(証明)』することは、半永久的に不可能なことになるからである」。逆に言えば、「単独で独立した不変不滅の存在(イデア)」というものがある(実在)すると想定すれば、「……たとえ肉体は滅んでも、その滅んだ肉体から、魂だけが抜

け出し、その抜け出した魂だけで、単独で生き続けることができ得る」という、まさに「魂の不死」というものを、見事に「立証（証明）」することができ得るからである。

それゆえ、プラトンは、まさに「魂の不死」というものを「立証（証明）」するためにこそ、いわゆる「イデア論」というものを採用するわけであるが、それを採用して「魂の不死」というものを「証明（説明）」してみたなら、何とか「立証（証明）」でき得たということである。そこで、もう一つの「大きな難題」であった、いわゆる「善美の問題」についても、同じように、その「イデア論」を用いて、まさに「根本（根源）」から「解明（説明）」してみることになるのである。それが、すなわち、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」ということになるのである。

*

*

プラトンが、有名な「イデア論」というものをどうしても採用しなければならなかったのは、いわゆるソクラテスの「三つの難題」【一つは、「魂の不死の問題」、一つは、「善美の問題」、そして、もう一つは、ソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」（その「哲学的問答法」）を、他の学問から区別して、まさに「哲学」（愛知学）として「確立すること」を、一挙に解決（説明）するためであったということである。

ところで、プラトンは、『パイドロス』という著作のなかで「魂の不死」を説明する前に、わざわざ次のような「前置き」を書いている。それは、「……純粋な美そのもの、善そのもの、大そのもの、その他、すべてそのようなものがあるという前提だ。君がこれを認め、これらのものは存在するという事に同意してくれるなら、ぼくはそれらのものから出発して、かの原因を見つけたし、魂が不死であることを示すことができるだろうと思うのだが。……」（100b）とある。そして、その「イデア論」を用いて、いわゆる「魂の不死」を「証明（説明）」したあとで、次のような極めて大事な言葉を書き添えているのである。それは、「……しかし、問題の重大さ、人間の無力さを思うと、これらのことがらについて、自分のなかにまだ不安の念を禁じえないのです。……」というシリアスの言葉を受けて、ソクラテスは、「……しかも、それだけではないのだ、シリアス」、「……君の言うことが正しいのは、あの『ものそのもの』が実在するという第一前提についてもそのようなのだ。たとえ、あの前提が君たちに信じられるとしても、それでもなお、もっと厳密な探究がなされなければならない」（107b）という言葉になるのである。

つまり、プラトンは、ソクラテスの「三つの難題」（それは「ソクラテスに関する三大難問」）を、まさに「イデア論」というものを「採用（導入）」して説明したことになるのである。そうすると、プラトンにとって、その大前提である「イデア論」（つまり「ものそのもの」が実在するという考え方）に間違いがあれば、それこそ、ソクラテスの「三つの難題」の「解明（説明）」というものは、すべて足元から音を立てて崩れていくことになるだろう。そこで、プラトンは、「イデア論」を大前提として、まさに『饗宴』『パイドロス』『国家』『パイドロス』、その他を書き上げたあとで、非常に不安になってきて、いわゆる『パルメニデス』や『ソピステス』、さらには『テイマイオス』という著作のなかで、その「イデア論」というものを徹底的に「吟味（検討）」し直してみることになるのである。

六、中期から晩年まで

さて、プラトンにとって、師ソクラテスに関する「三つの難題」が解明でき得たところで、一応「ソクラテスの問題」は、すべて終了したことになるかと思う。むしろ、プラトンは、四〇歳から六〇歳までの間は、一方では、いわゆる「アカデメイア」(学園)を開校して、若い人たち(青年たち)に「数学的諸学科」を中心とした教育を行ないながら、一方では、師ソクラテスに関する「三つの難題」の解明に全力を降り注いでいて、それは、「ソクラテス自身の最大の関心事」(それは、「正義や善美」とともに、それ以上に遙かに「プラトン自身の最大の関心事」であった、いわゆる「国家論」(つまり、「理想国家」というものを、まさに『国家』篇のなかで大々的に展開することになるわけである)。

そして、六〇歳から八〇歳までの後期においては、ソクラテスの影は、次第にうすれていくことになるが、それは、もう仕方のないことである。なぜなら、「ソクラテスの問題」は、いわゆる「三つの難題」が「解明(説明)」でき得たところで、一応、すべて終了しているのである、あとは、プラトン自身、一体、何に「興味や関心」を持ったかにかかっているのである。——そして、ここで非常に興味深いと思うのは、六〇代になったプラトンが、実際の「政治」への参加を試みたということである。——それは、シケリア島の政治に対して、「……人は、法や国制に関して自分が考えたところ(いわば「理想国家」)を、いつかは実現させるべくとりかからねばならないとすれば、いまこそとりかかるべきだというほうに、いわば天秤が傾いたわけです。なにしろ、ただ一人をじゅうぶんに説得できさえすれば、それで万事、善くすることになるというわけですから。……」という想いで、ディオオンやその仲間たちが待つシケリアへと渡航して、若い時からの希望であった「政治参加」を、この時期に行なおうとしたということである。

*

*

一方、後期著作としては、『ソピステス』『政治家』『ティマイオス』『クリテイアス』『ピレボス』『法律』その他等があるが、それは、プラトン自身、やり残した問題は、何かと「自問自答」した時に、自然と(或いは自ずと)プラトンの「頭の中」に浮かんできたものであり、その一つは、やはり若い時からの最大の関心事であった「政治(国家)」等に関する問題」に最終的に決着をつけること。次に、「イデア論」の再考、そして、もう一つは、いわゆる「自然についての問題」に関することになるかと思う。

さて、プラトンは、どうしても当時の「自然哲学」と対決しなければならなかった。なぜなら、当時の「自然哲学」の「考え方」は、いわゆる「無神論的自然観」であるのに対して、一方、プラトンの「宇宙論」は、最も善き存在である「神」が、まさに「宇宙」を創造したという「有神論的自然観」に立っているからである。これは、明らかに相反する「考え方」であり、それゆえ、この「問題」に決着をつけなければ、死んでも死にきれなかっただろう。そこで、プラトンは、『ティマイオス』や『法律』編などの著作のなかで、この問題については、徹底的に「解明(説明)」することになるわけである。

そして、プラトンは、八〇歳の時に、一説には「書きながら死んだ」と伝えられているが、これは、非常に興味深いものではないかと思う。というのも、師ソクラテスは、一生涯、「ものを書く」ということを行なわなかった人であったのに対して、その直弟子プラトンはと言えば、一生涯、「ものを書き続ける」ことを行なった人になるからである。しかも、プラトンは、晩年の幾つかの著作を除いては、ほとんど「ソクラテスを主人公(或

いは登場させた) 作品」だけで押し通し続け、それ以外の「作品」は、まったく書かなかったのか、あるいは書いた「作品」はあつたけれども、不幸にして紛失してしまったのか、それとも、プラトン自身が意識的に闇に葬ってしまったのか、それはともかく、プラトンは、何年も何十年も、ソクラテスという人間になりきって、ほとんど晩年まで(と敢えて言いたいほど)、そのソクラテスという人間と「一心同体」となって、まさに「ものを考え続ける」(つまり「真理探究」)を行なったということになるのである。

*

*

ソクラテス賛美

ソクラテス賛美について

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかで、酒に酔い痴れたアルキビアデスという登場人物が、ソクラテスを「賞賛する」（つまり誉め讃える）という場面が出て来るが、それは、アルキビアデスという歴史上の人物が、まさにそのように感じていたということもあるだろうが、それ以上に、プラトン自身が、恐らく、ソクラテスという人物からまさに「実感」として感じていたことの、心の底からの「吐露（告白）」になっているかと思う。それでは、その部分を少し長くはなるが、引用してみたいと思う。

*

*

ところで、諸君、僕はソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喻による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるに違いないが、じっさいは、真実のためであって、笑うためのものではないのだ。

さて、よくに言わせれば、この人は、彫像屋の店頭に置かれてあるあのシレノスの像に、まったくよく似ているよ。その像というのは、彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもった姿に細工されたものであり、それを両方に開くと、内部におさめられている神々の像があらわれるというものだ。（中略）

ところで、あなたが彼と違う唯一の点は、同じことをするのに、楽器を使わずに散文でするということだ。ともかく、ぼくたちの経験を言えば、ほかのだれかがあなたと違う話をするばあいには、たとえ大雄弁家の口から出たものであっても、それを聞くぼくらは、だれ一人気にもとめないと言っていだろうよ。ところが、あなたがじかに話したり、あるいは、あなたの話をほかの人が話ったりするのを聞けばあいいには、その話し手がひどく下手であっても、ぼくらはみな、男女年齢の区分なく、有頂天になってしまい、それに魅入られてしまうのだ。（中略）

じっさい、この人の話を聞くごとに、僕の心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバントスよりもずっとはげしい動悸がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。

ところが、ペリクレスや、ほかのすぐれた雄弁家たちの話を聞いたときには、うまいこと話すものだとは思ったけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかつた。ぼくの胸は、それによってかき乱されることはなかつたし、奴隷の身になったようないらだたしい気持になることもなかつた。ところが、ここにいるマルシユアス（つまりソクラテス）からは、ぼくは、いまのようなありさまでは自分の生活は生きるにも値しないと思われるような気持に、しばしばつき落とされたものだ。（中略）、また、ぼくは、数ある人間のなかでこの人にだけは、およそぼくの心にあるなんてだれ一人として思うまい気持を、つまり、相手がだれであれともかく恥じる、という気持を、経験したのだ。この人だけに、ぼくは恥じる気持を持つのだ。（中略）

そして、この人が、ぼくの譬えたところに、いかに似ていることか、また、この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっていないのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。（中略）

いいかね、この人には、だれそれが美しいなんて、ぜんぜん問題にならないのだよ。また、金持ちであるとか、世間からもてはやされるような榮譽をもっているなどということも同じくね。かえって、心のうちでは、だれ一人思ってもみないほど軽蔑しているのだ。そして、それらの持ち物を一顧の価値もないものと見なし、また、われわれをなきにも等しいつまらぬ者と考えているのだ。ぼくはあえてこう言う。かくて彼は一生を通じ、人々に向かつては空とぼけ、ふざけているのだ。

しかし、この人がまじめになり、その扉が開かれるとき、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じた。そして要するに、ソクラテスの命じることなら何でもしたがわなければならぬと思われた。……（『饗宴』215b~217a）

一、賛美の理由

さて、プラトンは、『饗宴』の最後のところで、なぜ、「ソクラテスを賞賛する」ような文章を敢えてつけ加えたのだろうか？ むろん、それにもいろいろな理由があっただろうが、その最大のものは、やはり誰よりもプラトン自身が骨身に染みて感じていた、ソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、何とか説明したかったからに違いない。そして、そのソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、どうしたら最も確に説明でき得るだろうかと考えたすえに、やがて、「……諸君、ぼくはソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喩による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるに違いないが、じつさいは、真実のためであつて、笑うためのものではないのだ。……」と。

次に、プラトンは、ソクラテスという人間は、次のようなものに非常によく似ているということから話し始めるわけである。つまり、「……さて、ぼくに言わせれば、この人は、彫像屋の店頭で置かれてあるあのシレノスの像に、まったくよく似ているよ。その像というのは、彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもった姿に細工されたものであり、それを両方に開くと、内部におさめられている神々の像があらわれるというものだ。……」

さて、ここに出てくる「シレノス」というのは、「……山野の精で、その特徴は、馬の耳を持ち、鼻は低く、体は、毛むくじやらの醜い老人だそうである。それに加えて、大変な知恵者であつたが、それをなかなか外に現わさなかつたという。早くからサテュロスとともに、ディオニュソスの従者と見なされるようになった」ということである。もちろん、プラトンが「シレノスの像」という例を挙げたのは、ソクラテスという人間の容貌がまさにそれに非常によく似ていたからであるが、それ以上に、ソクラテスという人間の「内部にあるもの」（その底知れぬ真の「凄さ」というものを、どうしても説明しておきたかつたからに違いない。というのも、プラトンにしてみれば、確かに数多くの人たちが、ソクラテスという人間の「すぐれた面」をあれこれ賞賛（賛美）しているだろうが、しかし、ソクラテスという人間の「内部にあるもの」（その底知れぬ真の「凄さ」というものを、どの程度まで（つまりその最も奥深くにある中心核まで）徹底的に理解できているだろうか？ 恐らく、できていないだろうという思いがあつたから

に違いない。

そして、そのような「思い」があればこそ、次のような言葉（文章）になるのである。つまり、「……しかしほかの点でも、この人は、ぼくの譬^{たと}えたところに、いかに似ていることか、また、この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっているのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。……」

二、ソクラテス理解

もちろん、これは、アルキビアデスの「言葉」（せりふ）として書かれているが、しかし、実際のアルキビアデスという歴史上の人物が、ソクラテスという人間をどの程度理解していたかと問えば、それは恐らく、ごく一般的な理解に留まっていただろう。それゆえ、表面的にはアルキビアデスの「ソクラテス賛美」という形式を取ってはいるが、しかし、実際は、プラトン自身の心の底からの「ソクラテス賛美」になっているということである。なぜなら、そのためにこそ、プラトンは、わざわざ『饗宴』の最後のところで様々な実例とともに、このような「ソクラテス賛美」を書き加えているわけである。

つまり、ここに出てくる、「……これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっているのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。……」ということは、すなわち、プラトンにしてみれば、当時、ソクラテスのまわりには数多くの仲間たちがいて、しかも、それぞれがそのソクラテスという人物の「すぐれた面」をあれこれ理解していたであろうが、しかし、自分以上にソクラテスという人間を徹底的かつその「最も奥深いところにあった中心核」まで、理解できている人間など誰もいないだろうと、プラトン自身は、密かに自負していたに違いない。

それでは、プラトンは、どうしてソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」まで辿り着けたのかと言えば、それは、言うまでもなく、プラトンは、長年（つまり何年も何十年）にも渡って、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、ただ単に外から見ていたのでは永遠に分からない、ソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」が、はつきりと見えてきたということである。そして、当時、ソクラテスを尊敬していた人たちは、数多くいたであろうが、しかし、ソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」まではつきりと観て取り、そのソクラテスという人間の底知れぬ真^{ほんとう}の「凄^{すこ}さ」というものを、心の底から「実感」として理解し得ていたのは、恐らく、プラトン一人だけだったに違いない。つまり、プラトンほどソクラテスという人間の底知れぬ真^{ほんとう}の「凄^{すこ}さ」というものを「実感」として深く理解し得た人は、誰もいなかった、ということである。（それは、それ以後も誰もいえないと言ってもよいほどである。）

逆に言えば、もし、プラトンが、長年、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を、わが身を以って、徹底的に生きてみるということを行なわなかったならば、恐らく、プラトン自身も、ソクラテスという人間のその奥深くに

あった「凄さ」というものをほんとうには「実感」できずに、ほかの仲間たち程度の理解に留まったかも知れないのである。つまり、プラトンは、長年、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を徹底的に生きてみることによつてこそ、初めて、プラトン自身も思いもかけないような感じで、そのソクラテスという人間の「最も奥深いところにあった中心核（つまり源泉）」が、はつきりと見えてきたということがある。

二、内部にあったもの

そして、引用文は、次のようになって行く。それは、「……この人がまじめになり、その扉が開かれる時、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じた」。

*

*

それでは、そのソクラテスという人間の「内部にあったもの」（……それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じたもの）とは、一体、何かと問えば、それは、まさに「……思慮、節制、勇氣、正義、その他」の、いわゆる「徳」（優れたもの）ということになるかと思う。

そして、それら「徳」の実例として、例えば、ソクラテスが、ポテイダイアに出陣した時に、「……困苦に立ちむかう点について、この人は、ほかのだれよりもたちまさつていたことや、冬の寒さに耐える強さという点でも、驚嘆すべき数々のふるまいをしたということ」などを初めとして、その時の出征中に、「……あるとき、彼は思索にふけり、朝早くから同じところに立ちつづけ、それからずつと翌朝の太陽が上がるまで、思索にふけて立ちつづけていたこと」や、また、戦闘中に、「……傷ついたぼくを見すてようとはせず、手をかしてくれ、ぼくをぼくの武器とともに無事救いだしてくれたこと……」。さらに、アテナイ軍が、デリオンから退却する時に、「……その自若さにおいて、この人がいかにラケスにたちまさつていたことか、そして《肩を怒らし闊歩して、横目でぎよろりぎよろり見ながら》、落ちていてあたりの敵味方を見まわし見まわし、人々のあいだをすすんで行ったために、この人も、その戦友も、戦場から無事に離脱することに成功した」など、実にいろいろな実例を挙げることになるわけである。

三、演説形式

それは、つまり、プラトン自身、どうしても様々な「実例」とともに、ソクラテスという人間の底知れぬ「真の「凄さ」というものを是非とも書き残しておきたかったからに違いない。しかし、一体、どこでどのようにして書いたらよいのだろうか？ というのも、プラトンの「著書」の書き方というのは、その初期作品では、ほとんどソクラテスと対話相手との「一問一答」の「対話（吟味）形式」になっているので、そのような記述では、いわゆる「ソクラテスの賞賛」を書くということは、できにくい。そこで、この『饗宴』という一人ひとりに「エロス」を賞賛する「演説」をさせるといふ形式のその流れのなか

で、自然と無理なく最後のところで、今度は、「ソクラテスの賞賛」というものをまとめ書き残したわけである。それでは、なぜ、アルキビアデスに「ソクラテスの賞賛」をさせたのか？ ほかの人でもよかったのではないのか。或いは、プラトン自身が「ソクラテスの賞賛」を行なってもよかったのではないかという疑問が残るかも知れない。

それでは、なぜ「アルキビアデス」なのか？ その最大の理由としては、次のようなことではないかと思う。つまり、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）にあった思い、というのは、ソクラテスという人物は、ただ単に「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）において、真に優れていただけでなく、実は、実際の行動においても極めて優れていた人物であり、その証拠として様々な「実例」をぜひともここで書き残しておくことが、かっ、た、と、い、う、こ、と、で、あ、る。そして、その様々な「実例」と直接深く関わっている「生き証人」としては、アルキビアデスという人物が、まさに「最適な人物」であったとともに、ソクラテスの「性的誘惑」に対する堅固さの実例としても、当時、アテナイ随一の「容姿・容貌」を誇っていたアルキビアデスの「性的誘惑」さえも容易に退けたということ、その点でも「最適な人物」だったということである。

四、内的成長（成熟）

それでは、ソクラテスをして、そういう様々な「徳」（「思慮、節制、勇氣、正義、その他」）などを持った人間たらしめていた「最も根源的な根拠（原因）」（つまりソクラテスの最も奥深くにあった中心核（源泉）とは、一体、何かと問えば、それこそ、まさにソクラテス自身もまったく自覚できない心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していたであろう「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）（それを敢えて言えば、「内的なる神」）であったとともに、ソクラテスの場合には、それに全面的に支配されていたということである。——それは、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて「心の眼」が開けると同時に、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも深く厳密に探求でき得るようになるということである。また、本能的に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになるとともに、真に「叡知」が働き始めることによって、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。

だからこそ、そのソクラテスの「言論」というのは、ほかの知識人たちとはまったく違って、次のようになって来るのである。それは、「……じつさい、この人の話を聞くごとに、ぼくの心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバンテスよりもずっとはげしい動悸（どうき）がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。」

ところが、ペリクレスや、ほかのすぐれた雄弁家たちの話を聞いたときには、うまいこと話すものだとは思ったけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかつた。ぼくの胸は、それによってかき乱されることはなかつたし、奴隷の身になつたようないらだたしい気持になることもなかつた。ところが、ここにいるマルシユアス（つまりソクラテス）からは、ぼくは、いまのようなありさまでは自分の生活は生きるにも値しないと思われるような気持に、しばしばつき落とされたものだ。（中略）、また、ぼくは、数ある人

間のなかでこの人にだけは、およそぼくの心にあるなんてだれ一人として思うまい気持を、つまり、相手がだれであれともかく恥じるという気持を、経験したのだ。この人にだけは、ぼくは恥じる気持を持つのだ。……」（『饗宴』215e~216b）

*

*

そして、そのような「内的経験」こそは、ソクラテスに対してだけではなく、恐らく、シヤカ、孔子、そして、イエス・キリストなどと直接、親しく交わった人たち（例えば弟子たち）の、共通した「内的経験」だったに違いない。つまり、何かが違う。たとえ同じような内容の話をほかの知識人たちから聞いても、「……なるほど、うまいこと話すものだとは思うけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかつた。しかし一方、この人の話を聞くごとに、あの秘儀に参じる熱狂的なコリユバンテスよりもずっとはげしい動悸がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。……」と。

それでは、一体、どこがどのように違うというのだろうか？ それは、真に「内的成長（成熟）」を遂げて、いわゆる「心の眼」が開けては、真に「叡知」が働いている人間から生じて来る「言葉」と、未だ真に「内的成長（成熟）」を遂げていない人たちから生じて来る「言葉」との決定的な違いなのである。しかもソクラテス、シヤカ、孔子、そして、イエス・キリストと言った人たちは、われわれ人間のなかにある「欲望的部分、気概（激情）的部分、それに理知的部分」のなかでも、その人たちの「理知的部分」に全面的に支配されていた人たちであるが、そのなかのソクラテスという人は、まさに「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）に全幅の信頼を寄せて、それにどっぷりと身をまかせては、何よりも「真善美」を愛し求めてやまないような「魂」（精神状態）になっていたとともに、本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行しては、その「成熟的な道徳観」を、まさに徹底的に「実践し得た人」でもあったわけである。

五、結び

最後に、もう一度、再確認しておきたいと思うが、プラトンは、どうしてもソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、何とか説明したいと思ひ、やがて、「……ところで、諸君、ぼくはソクラテスの賞賛を、こういう仕方ですべてみようと思うのだ。それは、比喻による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いの種にするためだとするに違いないが、じつさいは、真実のためであつて、笑うためのものではないのだ。」ということから書き始めるわけである。

つまり、プラトンがここで特に言いたかつたことは、次のようなことである。それは、ソクラテスが現に生きていた、その当時から、ソクラテスという人は、いろいろと誤解されることの多かつた人であつたが、しかし、それは、あくまでも外から見た「表面的なソクラテス像」に過ぎず、それは、決して、真の「ソクラテス像」などではなく、むしろ、その奥に隠されている「ソクラテス像」こそは、まさに真正正銘の「真のソクラテス像」であるとして、それを、プラトンは、わかりやすく、まさに「シレノスの像」（つまり「比喻による方法」）によって説明しようとしたということである。

そして、表面的にはアルキビアデスの「告白」という形を取ってはいるが、しかし、実際は、プラトン自身がソクラテスという人物をどのように見ていたかの心の底からの「告白」ということになるのである。そして、もう一度、最初の引用文を、一字一句、丁寧に読んでもらえれば、プラトン自身の心の底からの「告白」（敢えて「肉声」）をはっきりと聴くことができ得るだろうと思う。

*

*

歴史上の「ソクラテス」

歴史上の「ソクラテス」について

さて、歴史上の「ソクラテス」が、いったいどういう人物であったかはなかなかわかりにくい問題ではあるが、この問題についても、すこし考えてみたいと思う。

まず、今日の専門家の多くの人たちは、実際のソクラテスという人物は、例えば、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という著作のなかに出てくるソクラテスこそは、まさに実際のソクラテスに近いものであって、一方、プラトンの「様々な著作」のなかに出てくるソクラテスという人物は、むしろプラトンによつてかなり「理想化されたソクラテス」になっているのではないかというのが、今日の一般的な認識になっているかと思う。

つまり、実際のソクラテスという人物は、いわゆる「クセノフォンの著作」のなかに出てくるソクラテスに近いものであったが、プラトンによつて可能な限り「理想化されてしまった」という「考え方」である。この「考え方」には、当然のことながら、様々な「証拠や根拠」があるに違いない。——例えば、プラトンの『第二書簡』のなかに出てくる、「……そして今日プラトンの作と呼ばれているものは、理想化され若返らされたソクラテスのものに、ほかなりません」というのも、あるいはその一つになるのかも知れない。

それでは、プラトン自身は、ソクラテスという人物を、一体、どういうふうに見ていたのだろうか？　つまり、今日の専門家の多くの人たちが考えるように、実際のソクラテスというのは、例えば、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という著作のなかに出てくるようなソクラテスに近いものと考えていたのか、それとも、まったく逆に、実際のソクラテスというのは、むしろ、底知れないほどの凄い人物であったと考えていたのか、そのどちらかということになるかと思う。

この「問題」の答えは、例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかにはっきりと「記述（明記）」されているかと思う。それは、次のようなものである。つまり、プラトンの『饗宴』という著作は、今までの「対話形式」の記述方法とは少し違って、むしろ祝宴に出席した人たちが順番に「エロスを讃える演説」を行なうという「記述形式」になっているかと思う。それでは、プラトンは、なぜ、そのような「記述形式」を採用したのだろうか？　もちろん、それにもいろいろな理由があっただろうが、その一つとして、プラトンは、前々からどうしても「実際のソクラテス」というものを「様々な実例」とともにまとめて書き残しておきたかった。しかし、今までの「一問一答の対話形式」の記述では、それは、できにくい。そこで、プラトンは、祝宴に出席した人たちが順番に「エロスを讃える演説」を行なうという「記述形式」の流れのなかで、つまり、できるだけ自然で無理のない流れのなかで、前々から書きたかった、いわゆる「ソクラテス賛美」というものを最後のところでまとめて書き残したのではないかという考え方である。

つまり、プラトンの『饗宴』という著作は、基本的には祝宴に出席した人たちが順番に「エロスを讃える演説」を行なうという内容のものであり、それゆえ、最後のところに出て来る「ソクラテス賛美」というものは、どちらかと言えば、「おまけ（付け足し）」的な印象が強く、『饗宴』という著作のなかにあつては、それほど重要なものではないように思われがちであるが、しかし、それは、大変な間違いであり、プラトン自身は、むしろ「ソクラテスの演説部分」（つまり「美のイデア」の記述部分）と、もう一つは、「ソクラテス賛美」の部分、この「二つの部分」こそは、どうしても（或いは何が何でも）書

き残しておきたかったからこそ、いわゆる『饗宴』という著作は、まさに書かれたのではないかという、そういう「考え方」になるのである。

しかも、「ソクラテス賛美」というのは、表面的には酒に酔った「アルキビアデスという登場人物の告白」という形式をとってはいるが、実際は、そうではなく、プラトンが「実際のソクラテスという人物」をどのように見ていたかという、そのプラトン自身の「心の底からの告白」になっているということこそは、最も大事な要点なのである。

*

*

それでは、なぜ、そうだとばかりと断言できるのか？ それは、次のような引用文からもはつきりとわかるものである。つまり、「……ところで、諸君、僕はソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喩による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるにちがいないが、じっさいは、真実のためであって、笑うためのものではないのだ。

さて、ぼくに言わせれば、この人は、彫像屋の店頭に置かれてあるあのシレノスの像に、まったくよく似ているよ。その像というのは、彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもった姿に細工されたものであり、それを両方に開くと、内部におさめられている神々の像があらわれるというものだ。(中略)

ところで、あなたが彼と違う唯一の点は、同じことをするのに、楽器を使わずに散文でするということだ。ともかく、ぼくたちの経験を言えば、ほかのだれかがあなたと違う話をするばあいには、たとえ大雄弁家の口から出たものであっても、それを聞くぼくらは、だれ一人気にもとめないと言っていだろうよ。ところが、あなたがじかに話したり、あるいは、あなたの話をほかの人が話ったりするのを聞けばあいいには、その話し手がひどく下手であっても、ぼくらはみな、男女年齢の区分なく、有頂天になってしまい、それに魅入られてしまうのだ。(中略)

じっさい、この人の話を聞くごとに、僕の心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバントスよりもずっとはげしい動悸がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。

ところが、ペリクレスや、ほかのすぐれた雄弁家たちの話を聞いたときには、うまいこと話すものだとは思ったけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかつた。ぼくの胸は、それによってかき乱されることはなかつたし、奴隷の身になったようないらだたしい気持になることもなかつた。ところが、ここにいるマルシユアス(つまりソクラテス)からは、ぼくは、いまのようなありさまでは自分の生活は生きるにも値しないと思われるような気持に、しばしばつき落とされたものだ。(中略)

しかも、ほかの点でも、この人は、ぼくの譬えたところに、いかに似ていることか、また、この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっているのではないのですぞ。だからこのぼくが、それをはつきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。

すなわち、諸君が外から見たところでは、ソクラテスは美しい人に接すると、まず間違いないく恋してしまい、四六時中そういう人たちのことに心を傾け、夢中になっている。また、万事につけて無知であって、なにひとつ知ってはいない。このような彼の外形こそは

シレノス的というものではあるまいか。大いにそうだと。なぜなら、この人のまどつているそういう外形は、ただ外側だけのものであって、この点では刻まれたシレノスと同じようなものなのだから。ところが内部は、どうか。それが開かれたとき、そこにはどれほどの思慮がみち溢れていることか。

いいかね、この人には、だれそれが美しいなんて、ぜんぜん問題にならないのだよ。また、金持ちであるとか、世間からもてはやされるような栄誉をもっているなどということも同じくね。かえって、心のうちでは、だれ一人思ってもみないほど軽蔑しているのだ。そして、それらの持ち物を一顧の価値もないものと見なし、また、われわれをなきにも等しいつまらぬ者と考えているのだ。ぼくはあえてこう言う。かくて彼は一生を通じ、人々に向かつては空とぼけ、ふざけているのだ。

しかし、この人がまじめになり、その扉が開かれるとき、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。

そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じた。そして要するに、ソクラテスの命じることなら何でもしたがわなければならぬと思われた。……」(『饗宴』215b-217a)

*

*

さて、引用が長くなってしまったが、それは、いったいなぜなのか？ それは、ここに引用した文章は、そのままそっくりプラトンが「実際のソクラテスという人物」をどのように見ていたかという、そのプラトン自身の「心の底からの告白」になっているだろうと思うからである。それゆえ、ここに引用した文章を、できるだけ「一字一句」丁寧に読んでもらえれば、まさにプラトン自身の「心の底からの告白(その肉声)」をはっきりと聴くことができ得るだろうと思うからである。

それでは、ここで引用文の説明を少しばかりしたいと思うが、まず最初は、次のような引用文からである。つまり、「……」ところで、諸君、僕はソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喻による方法である。だが、この人は、自分のもの笑いのたねにするためだととるにちがいないが、じつさいは、真実のためであって、笑うためのものではないのだ。……」と。

さて、ここに引用した文章が、どれほど重要なものであるか。それを説明しなければならぬ。というのも、プラトンは、一体、どういう「思いや考え」から、いわゆる「ソクラテス賛美」というものを書いたのかと問えば、それは、まさに「……真実のためであって、笑うためのものではなかった。……」ということである。

つまり、プラトンは、当時のアテナイの一般の人たちが、いわゆる「ソクラテスという人物」について抱いていたであろう、その「イメージ」というものは、実は、外から見た「表面的なソクラテス像」に過ぎず、それは、プラトンのように、内から観た「真の姿のソクラテス像」とはまったく違うものであったということ、ここでこそ、はっきりと説明しておきたかったということである。

つまり、プラトンは、外から見た「表面的なソクラテス」と、その内に隠されている「真の姿のソクラテス」とは、まったく違うものであり、その例として、プラトンは、いわゆる「シレノスの像」というものを取り上げるわけであるが、その像というのは、「……彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもった姿に細工されたものであり、それを両方に開く

と、内部におさめられている神々の像があらわれるというもの……」になるわけである。

そして、プラトンは、外から見た「表面的なソクラテス」というのは、次のようなものであったと説明をしているのである。つまり、「……すなわち、諸君が外から見たところでは、ソクラテスは美しい人に接すると、まず間違ひなく恋してしまい、四六時中そういう人たちのことに心を傾け、夢中になっている。また、万事につけて無知であつて、なにひとつ知つてはいない。このような彼の外形こそはシレノスのというものではあるまいか。大いにそうだとも。なぜなら、この人のまどつていゝるそういう外形は、ただ外側だけのものであつて、この点では刻まれたシレノスと同じようなものなのだから。……」

また、「……ソクラテスの話というものは、これをひとつ聞いてみようという気になつたばあい、最初聞いたときには笑止千万なものに思われるだろう。なにしろ、滑稽な語句を外側にまどつていゝるのだから。人を愚弄するサテュロスの毛皮といったものをね。この人の話すことときたら、荷驢馬や、どこかの鍛冶屋、靴屋、鞣皮屋といった調子で、いつも同じ言葉で同じことを言つていゝるように思われるのだ。だから、勝手を知らぬ愚か者は、例外なく彼の話をあざ笑ふことになるだろう。……」

一方、プラトンは、その内に隠されている「真の姿のソクラテス」というのは、次のようなものであつたと説明しているのである。「……ところが内部は、どうか。それが開かれたとき、そこにはどれほどの思慮がみち溢れていることか。(中略)

そして、この人がまじめになり、その扉が開かれるとき、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただだ賛嘆に値するものと映じた。そして要するに、ソクラテスの命じることなら何でもしたがわなければならぬと思われた。……」といふことになるわけである。

つまり、歴史上のソクラテスという人物は、外から見た「表面的なソクラテス」と、その内に隠されている「真の姿のソクラテス」とでは、まったく違ふものであり、それゆゑ、クセノフォンのように「外から見たソクラテス」と、プラトンのように「内から観たソクラテス」とでは、その「ソクラテス像」が非常に違つたものになるのは、むしろ当然のことなのである。だからこそ、プラトンは、次のような言葉を敢えてつけ加えることにもなるわけである。つまり、「……この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかつていゝないのですぞ。だからこのぼくが、それをはつきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。……」

つまり、プラトンにしてみれば、当時、多くの人たちがソクラテスの「すぐれた面」をあれこれ賞賛していたであろうが、しかし、自分ほどソクラテスという人間の最も奥深いところにあつた「中心核」までしっかりと観て取れている人など誰もいないだろうと、ひそかに自負していたに違ひない、といふことである。

それでは、プラトンは、どうしてソクラテスという人間の最も奥深いところにあつた「中心核」までしっかりと観て取ることができ得たかと言へば、それは、ソクラテスを主人公とした数多くの著作を書くという実際の行為によつて、プラトンは、何年も何十年にも渡つて、自らソクラテスとなつて、その「内的世界」(特にソクラテスの「思惟界」)を徹底的に生きてみることであり、その結果として、自ずから(或いは思いもかけないよ

うな感じ)で見えてきたということである。

そして、例えば、『ソクラテスの弁明』などにしても、今日では、いわゆる「理想化されたソクラテス像」に過ぎないというのが、むしろ「一般的な見方」になっているかと思うが、しかし、プラトンにしてみれば、それは、とんでもない誤解であり、『ソクラテスの弁明』のなかに描かれている「ソクラテス」というのは、いろいろと誤解を与えている「表面的なソクラテス」などではなく、むしろ、ここに描かれている「ソクラテス」こそは、まさに正真正銘の「真の姿のソクラテス像」そのものである、という想いから書かれたものに違いなく、それゆえ、たとえいろいろな脚色があつたとしても、それらはすべて、「……真実のためであつて、決してありもしないソクラテス像をでっち上げるためのものではなかつた」ということこそは、最も大事な要点になるのである。

また、『ソクラテスの弁明』のなかには、実際の裁判でソクラテスが実際には言っていないなかつたものまで書かれているのではないかという疑惑があるかと思うが、それなども、二十歳から二十八歳の間、若いプラトンが晩年のソクラテスといろいろと話をする機会も多かつたと思うが、そのような時に、例えば、「……若いときには、いつたいどういふものに興味を持ったのですか？ また、いつ頃から、あるいはどういふきっかけから、このような『対話（吟味）活動』を始めるようになったのですか？ その他」、そのようなことを聞く機会があつたとしても、何も不思議なことはいらぬ。

そして、そのような時に、晩年のソクラテスが、「……いや、実は、若いころ、あの『自然研究』というものに驚くほど熱中することがあつただよ」といふような話をしたとしても、なにも不思議なことではなく、また、「……いや、実は、親友のカイレポンという人が、わざわざ『デルポイ』まで行って、『ソクラテスより賢い人間はいるかどうか』などとたずねることがあつただよ」といふ話をしたとしても、何も不思議なことはいらぬ。つまり、若いプラトンは、晩年のソクラテスから直接、「ソクラテスに関すること」をいろいろ聞く機会があつたとしても、何も不思議なことではなく、また、まわりの仲間たちからも間接的に「ソクラテスに関するいろいろなことを聞き知つていた」としても、何も不思議なことはいらぬ。そのようなことを、例えば、『弁明』のなかに敢えて書き加えたとしても、それほど不思議なことにはならないだろう。そして、そのようなことをするのはすべて、「……真実のためであつて、決してありもしないソクラテス像をでっち上げるためのものではなかつた」ということである。

*

*

最後に、もう一度、プラトンがここで最も言いたかつたことは、一体、何だつたかを再確認しておきたいと思うが、それは、次のようなことであつたということである。

つまり、歴史上の「ソクラテス」といふ人は、いわゆる外から見た「表面的なソクラテス像」と、その内に隠されている「真の姿のソクラテス像」とでは、実は「まったく違うものであつた」といふことであり、そして、その例として、プラトンは、いわゆる「シレノスの像」といふものを取り上げているのである。

つまり、当時のアテナイの一般の人たちが、いわゆる「ソクラテスという人物」について抱いていたであろう「イメージ」といふものは、実は、外から見た「表面的なソクラテス像」に過ぎず、それは、その内に隠されている「真の姿のソクラテス像」とは、まったく違うものであつたということを、ここでははっきりと説明しておきたかつたということである。

ある。つまり、「外見」（外から見聞できる表面的なソクラテス）と「内面」（外からは見聞きできない内実的なソクラテス）とは、全く違っていたということである。

そして、『ソクラテスの弁明』のなかに描かれている「ソクラテス」というのも、いろいろと誤解を与えている「表面的なソクラテス像」などではなく、むしろ、ここに描かれている「ソクラテス」こそは、まさに真正正銘の「真の姿のソクラテス像」そのものであるという想いから書かれたものになるのである。——それゆえ、われわれは、プラトンという人間を信じてもよいのである。なぜなら、プラトンがそのようなものを書いたのはすべて、「……真実のためであつて、決してありもしないソクラテス像をでっち上げるためのものではなかつた」ということになるからである。

そして、それを「裏付ける言葉」としては、次のような「言葉」（文章）が残されているのである。それは、まさに「ソクラテス賛美」をする前にわざわざ「前置き」で述べている言葉であるが、それは、「……もしぼくが、ほんとうでないことを何か言ったら、いやでなければ、話の途中で、ぼくをひき止めてもらいたい。そして、ぼくの言うのは嘘だと言つてほしいのだ。ぼくには、わざと嘘を言うつもりは毛頭ないのだからね。……」という言葉である。（『饗宴』216。）

*

*

あとがき

あとがき

さて、歴史上の「ソクラテスの問題」であるが、ここで最も大事なことは、当時、プラトン以外のほとんどの人たちは、「ソクラテスという人物」については、主に、外から実際に見聞きした「ソクラテス」という人物、それは、まさに外から見た「表面的なソクラテス像」に過ぎないのだが、その外から見た「表面的なソクラテス像」を基にしてあれこれ書かれた実に数多くの「書物」(文献)などが遺^{のこ}されることとなり、その実に数多くの「書物」(文献)などを読んだ古今東西の実に数多くの「学者たち」というのは、当然のことながら、主に、外から見た「表面的なソクラテス像」を基にしてあれこれ書かれた実に数多くの「書物」(文献)などをその「根拠」(証拠)として、いわゆる今日のような「ソクラテス像」を創り上げることになったということである。

一方、外から見た「表面的なソクラテス像」などではなく、むしろ、その内に隠されている「真の姿のソクラテス像」を基にして書かれた、例えば、プラトンの『ソクラテスの弁明』などは、所詮、極端に「理想化されたソクラテス像」に過ぎないという評価になるのは、むしろ、当然のことなのである。それでは、一体、どうしたらよいのかと問えば、それは、結局、外から見た「表面的なソクラテス像」と内に隠されている「真の姿のソクラテス像」とを合わせたものこそは、まさに「歴史上のソクラテス像」になるということである。

令和四年十一月吉日 (完成版)

如月翔悟

プラトンの世界

目次

プラトンの世界

① 無知の自覚と自然の問題

- 一、 自然から「人間探究」へ
- 二、 アリストパネスの「雲」
- 三、 徹底した「無知の自覚」
- 四、 揺るぎない「足場」

② 「イデア論」への「六段階」

- 一、 第一段階
- 二、 第二段階
- 三、 第三段階
- 四、 第四段階
- 五、 第五段階
- 六、 最終段階

③ 無知の自覚とイデア論との関係

- 一、 真知とは
- 二、 イデアとは
- 三、 魂の不死の立証
- 四、 真知とイデア
- 五、 イデア論の完成

※ 参考文献

無知の自覚と自然の問題

さて、プラトンは、紀元前四二七年に、アテナイに生まれている。一方のソクラテスは、それより遡ること四十二年前の紀元前四六九年に、同じくアテナイで生まれている。そして、ソクラテスが生まれた頃の古代ギリシアのアテナイは、有名な「ペルシア戦争」（前四九〇年～前四七九年）の勝利からちょうど一〇年目、ペルシア帝国に対抗するための、まさに「デロス同盟」の盟主として、政治、経済、軍事、そして、文化の中心都市として発展するとともに、やがて訪れる名高いペリクレス時代の直接民主政治のもと、まさに「全盛期」（前四四三年～前四二九年）を迎えようとしていた時期にあたり、この時期を含めた前後には、実に数多くの人物が登場して活躍することにもなるわけである。

例えば、ソフィストとして有名なプロタゴラスやゴルギアスなどを初めとして、修辞学で有名なアンティフォンやリュシアス、また、三大悲劇作家と呼ばれるアイスキュロスやソフォクレス、そしてエウリピデス、また、喜劇作家としては、アリストパネスが特に有名である。また哲学では、タレスから始まったイオニア自然哲学を受け継いだアナクシマンドロスやヘラクレイトス、また、多元論者のアナクサゴラスやエンペドクレス、あるいは単子（アトム）論者のデモクリトス、一方、イタリアに発生したエレア学派の Parmenides や愛弟子のゼノン、そして、歴史家としては、有名なヘロドトスやツキディデス、さらに医学の祖とも言われるヒポクラテス、その他、実に数多くの人物が活躍する、いわゆる「ギリシア古典文化の黄金時代」を、ソクラテスは、まさに身を以って生きていることになったわけである。しかも、それは、ソクラテスの誕生から三十八歳までの、人間として最も強い影響を受けやすい、そして、人間としてまさにでき上がるこの若い時期を、極めて恵まれた「知的文化」の環境のなかで育ったことは、ソクラテスにとっては極めて幸いなことであつたに違いない。

さて、若い時のソクラテスは、誰もがそうであるように、実に様々なものに興味や関心を持って、数多くの著名な人物たちの「考えや思想」などを好んでたずね歩くという、いわゆる「知的遍歴」を行なったことは、容易に想像できるものである。それゆえ、若い時に、自然の問題にも興味を持ち、アナクサゴラスの「自然哲学」の書物を読んだとしても、何も不思議なことはない。恐らく、当時までの主な「考えや思想」などは、ソクラテスなりに「知的遍歴」を行なっていたのかも知れない。そうでなければ、その後の数多くの知識人たちの「対話（吟味）活動」において、相手と対等に議論し合い、そして、相手を論破するようなことはでき難かつただろう。

つまり、ソクラテスは、当時の知識人たちが考えたり主張するようなことは、若い時の「知的遍歴」によって、それなりに「遍歴」していたのであり、そういうことだけではどうしても満足できずに、やがてソクラテス独自の「人間探究」へと向かうことになるのだろう。つまり、ソクラテスにしてみれば、「……若い時に、いろいろ著名な人物の『考えや思想』などを好んでたずね歩き、自分なりにいろいろな知識にふれたはずだが、しかし、それらは、少しも自分を満足させてはくれなかった。また、それによって自分は少しも利口になっていない。ましてや人間とは何なのか、どう生きたらよいのか、また、人間にとって何が大事なことなのか、その他、それらについて自分は何も知らない、まったくの無知同然ではないか！」と。——そのような「想い」に直面するようなところまで行かなか

れば、ソクラテスが始めたような「人間探究」の哲学は、決して生まれてはこないのである。つまり、「……できる限りの知識を学んでみたが、だめだった。少しも自分を満足させてはくれなかった。一体、人間とは何なのだ！ また、どう生きればよいのだ。そもそも人間にとって何が大事なことであり、何がそうではないのか。そして、人間にとって何が価値あることであり、何がそうではないのか、自分にはもう何一つ解らない、……等々」の、魂の底からの悲痛な「叫び（疑問）」が、まだ若いソクラテスの「心（精神）」の中に生じて来たとしても何も不思議なことはいらう。そして、その魂の底からの悲痛な「叫び（疑問）」（問い）の芽生えこそは、まさにソクラテス自身が始めた、いわゆる「哲学」（愛知学）の「源泉（根源）」そのものである。

一方、当時までの数多くの優れた人たち（思想家たち）は、そこまでは行けなかった。なぜなら、彼らは、自分が創り上げた「考えや思想」などに満足して、そこで眠ってしまったからである。しかし、ソクラテスだけは、ものを考えるところの「どん底」まで行った人である。そこは、すべての「意味や価値」が消えてしまうような世界である。そして、その「どん底」からの悲痛な「叫び（問い）」こそは、そのままソクラテスの「人間探究」の「哲学」（愛知学）へと向かう動機になったと考えてもよいのだろう。

もちろん、ソクラテスも最初からそういう「人間探究」を始めたわけではないだろう。それは、無理である。確かに、若い時には誰でもどう生きたらよいのか、人間にとってどういうことが意義あることなのか、あれこれ考え始める時期なのである。しかし、それらは、どれもこれも中途半端で終わるのが常である。なぜなら、若い時期の「思考（思索）能力」そのものが、まだ未熟な段階であるからである。それゆえ、最初は、ソクラテスもいろいろな人たちの「考えや思想」などを好んでたずね歩くという、いわゆる「知的遍歴」を行なわなければならなかった。これは、ソクラテスだけではなく、プラトンも行なっているし、もちろん、二人だけの問題ではなく、誰もが若い時期には一度は徹底して行なわなければ、人間としての「知的成長（成熟）」を真に望むことは、到底でき得ないものである。それゆえ、誰もがその人なりの「知的遍歴」を行なうことになるわけである。そして、各人がそれぞれの努力によって自分の「内的世界」を真に鍛え、育て上げることによってこそ、やがて、その人なりの「独自の世界」を生み出せるようになるわけである。それと同じようなことが、当然のことながら、ソクラテス自身にも起こり、やがて、彼独自の「人間探究」へと向かうことになったのだろう。

一、自然から「人間探究」へ

それでは、ソクラテスは、いつ頃から彼独自の「人間探究」に向かうようになったのだろうか。もちろん、これという確かな証拠は何も残っていないので、われわれは、ただあれこれ推測するだけであるが、一つには、アナクサゴラスの書いた自然哲学の書物をかなり期待を持って読んでみたが、期待するようなものがまったく得られず失望し、それから彼らの「自然哲学」から離れて、ロゴス（論理）の中に真理を見い出すようになったというのが、いわゆる『パイドン』という著作のなかに出てくるので、あるいはそうなのかも知れない。ただソクラテスの「資質」から想像して、意外に早く「自然」の問題への興味や関心は、薄れたかも知れない。というのも、ソクラテス自身の生来の「資質や性格」と

いうものが、もともと「自然」よりも「人間」の問題の方に向いていたからである。しかし、若い時には恐らく、大変な知的好奇心を持って、「自然」の問題についてもかなり徹底的に学んだに違いない。というのも、若しもそれが中途半端な学習であれば、いつまでも「自然」の問題に対しては、やり残した気持ちが残るだろう。つまり、ある程度、徹底的に学ぶことよってこそ、やはり、これにはあまり向いていないなあ、ということが、はつきりと「自覚」できるのであり、中途半端な学習では、いつまで経っても、やり残したような気持ちが残って、はつきりと離れることができないからである。また、ソクラテスという人間の「性格」から言っても、中途半端なところで学習を投げ出すようなことは、決してでき得なかつただろう。それゆえ、ソクラテス自身、「……自然の問題は、自分には全く不向きであるとともに、自分の心（魂）を真に満たしてくれる学習（或いは研究）対象ではない」と、はつきりと自覚できるところまで行った時に、ソクラテスは、いわゆる当時の「自然哲学的な考え方」への興味や関心はうすれ、やがて、「人間」の問題に本格的に向かうことになったのだろう。それでは、それは、何歳頃のことなのだろうか。恐らく、二〇代後半から三〇歳前後ぐらいではないだろうか。というのも、われわれ人間は、ふつう二〇代の前半ぐらいでは、なかなか自分でも自分のことがよく分からないものであるし、二〇代後半から三〇歳前後（遅くとも三十五歳前後）には、だいたい自分本来の真の「志向」というものも、はつきりとしてくるものだからである。

また、『バイドン』という著作の中にも、「……若いころ、あの自然研究と言われる学問に、驚くほど熱中したことがあった。（中略）、そして、いろいろと学習や研究をした結果、ついには、自分はこのような研究には生まれつきまったく無能だと思うようになってた」（96 b 3 c）というのがある。もちろん、このプラトンの記述が、そのままソクラテス自身の若い時の経験であるという証拠はどこにもない。むしろ若い時にプラトン自身が経験したことを作中のソクラテスに語らせているのだという、そういう考えの方が遙かに有力なのである。ただ思うに、われわれ人間というのは、ソクラテスやプラトンだけに限らず、若い時とは、誰でも非常に知的好奇心の旺盛な時期なのである。ましてやソクラテスやプラトンなどは、その知的好奇心が誰よりも旺盛であったであろうから、当時までの数多くの著名な人物たちの様々な「考えや思想」などを好んでたずね歩くという、いわゆる「知的遍歴」を行なったであろうことは、容易に想像できるものである。そして、ソクラテス自身、「……若いころ、あの自然研究と言われる学問に、驚くほど熱中したことがあった」としても、何も不思議なことではないし、もちろん、プラトンにも当然そういう「知的遍歴」はあったはずである。それは、何もソクラテスやプラトンだけの問題ではなく、われわれ人間は、誰でもそういう「知的遍歴」を一度は徹底的に行なわなければ、人間としての極めて厳密な「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げることなど、到底できないことだからである。

ところで、もし若い時から、ソクラテスが「自然」の問題にはまったく興味も関心も示さず、最初から「人間」の問題に入ったならば、ソクラテスほどの知的好奇心の誰よりも旺盛な人物が、どうして、一生涯、その「自然」の問題にまったく興味も関心も示さずに過ごすことができただろうか。それは、絶対にあり得ないことである。だから、若い時には「自然」の問題だけではなく、その他の当時までの著名な人物たちの主な「考えや思想」などもソクラテスなりに、恐らく、大変な知的好奇心を持って、いわゆる「知的遍歴」

を行っていたことは、ほぼ間違いないことだろうと思う。そして、そのような「知的遍歴」を経ることによってこそ、ソクラテス自身の「知的成長（成熟）」を可能にしたとともに、自分にとつて最も関心のある対象は、まさに「人間」の問題であることもはっきりと「自覚」できるようになったということである。

つまり、ソクラテスは、いわゆる「自然の問題」の研究というものが、自分にはまったく不向きであることをはっきりと「自覚」するようになる。そして、ソクラテスの「資質」から想像して、それは、意外に早く訪れたに違いない。恐らく、それは、二〇代後半から三〇歳前後ぐらいではないだろうか。もちろん、そのことは、ソクラテスが「自然の問題」そのものにまったく興味や関心を失ったということではない。ただ、当時の自然哲学者たちがするような「考え方」には、はつきり、極めて大事なところであり、当時の自然哲学者たちがするような「考え方」には、はつきり、「興味を失っていた」であろうが、「自然の問題」そのものにまったく興味や関心を失っていたということではない。なぜなら、ソクラテス自身、彼なりの「自然観」をはつきりと持っていただろうが、それは、当時の自然哲学者たちの「考え方」とは、はつきりと違っていたということである。つまり、ソクラテス自身が『弁明』のなかで、自分はそういう議論を一度もしたことはないというものは、当時の自然哲学者たちがするような「考え方」（つまり無神論）に基づいた議論をしたことは一度もないが、しかし、「自然の問題」について、例えば、弟子たちに問われれば、ソクラテスなりの「考え方」を披瀝することがあったとしても、何も不思議なことはないだろう。ただ、ソクラテス自身、自ら好んで「自然の問題」を議論の対象とはしなかったということである。それは、「自然の問題」より、われわれ「人間の問題」のほうが、遙かに大事かつ切実な問題だからである。そして、二〇代後半から三〇歳前後ぐらいになった頃には、もちろん、「自然の問題」も話題にのぼることがあったかも知れないが、主に「人間」の問題を中心にして、親しい仲間たちと好んで様々な「対話（吟味）活動」を行っていたのだろう。それゆえ、この頃のソクラテスは、もちろん、広場（市場）や街頭、その他で、いろいろな人たちと「対話（議論）活動」を行なうことは、当然、あっただろうが、しかし、まだそれほど本格的には行なわれてはいなかったのだろう。そして、そういうことが本格的かつ徹底的に行なわれるようになるのは、あの有名な「デルポイの神託」のお告げ以降ではないかと思う。

二、アリストパネスの「雲」

ただ、ここで問題になるのは、アリストパネスの有名な『雲』の問題である。この喜劇が上演されるのが、ソクラテスが四十六歳の時である。そして、この劇の主人公のソクラテスは、「空中のことを思索したり、地下のことをしらべたり」するような、いわゆる自然哲学者であるとともに、すぐれた論争家（強弁家）としても描かれている。そして、この喜劇が上演されると、それなりの反響があったかと思うが、それは、その喜劇そのものの面白さもあるだろうが、ソクラテスという人物は、「……天上地下のことを探究し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている」ような人物として、一般にアテナイの市民たちにはそう思われていたのだろう。そうであれば、この喜劇が受け入れられるはずもないからである。つまり、ある有名な人物を主

人公にして喜劇を書く時には、できるだけその人物の特徴をとらえて、それをかなり誇張した形で、面白おかしく書き上げるものだが、しかし、それは、まったくの嘘ではなく、見ている観客にも、「そうだ、そうだ、そういうところが確かにあるぞ！」と思わせなければ、喜劇としては成功したことはないだろう。

とすると、四十六歳前後のソクラテスが、未だ当時の自然哲学者たちのような「考え方」に取り憑かれていたことになる。しかし、四十六歳にもなったソクラテスが、彼には全く不向きと思われる自然哲学者の「考え方」になお取り憑かれていたことは、全くあり得ないことである。それは、ソクラテス自身も、その『弁明』のなかではつきりと否定しているものである。それゆえ、前にも話したように、二〇代後半から三〇歳前後ぐらいには、すでにソクラテスは、「人間」の問題に本格的に向かつていただろう。少なくとも自然哲学者のような「考え方」には、はつきりと「縁を切って」いたはずである。だとすれば、この「矛盾」を、いったいどうしたらよいのだろうか？

しかし、それは、それほど難しい「問題」ではないだろう。というのも、ソクラテス自身、「……若いころ、あの自然研究と言われる学問に、驚くほど熱中したことがあった」としても、何も不思議なことではなく、また、二〇代後半から三〇歳前後ぐらいには、すでにそういう考えから離れて、本格的に「人間」の問題に向かつていただろう。しかし、親しい仲間たちとの「対話（議論）」のなかで、例えば、「自然」の問題が話題にのぼるようなことがあっても何も不思議なことではなく、そのような時には、ソクラテス自身、彼なりの考えを仲間たちに話したりしただろうし、また、「人間」の問題にも積極的に自分なりの考え方を話していただろう。そして、そういう「人間」の問題（時には「自然」の問題）もあつたかも知れないが）を議論したりしているソクラテスを中心とした仲間たちというのは、まさに喜劇のなかに出てくる「ソクラテスの学校」（それは「思索所あるいは思弁家の店」という意味を持つもののように見えたとしても、何も不思議なことではない。少なくとも一般のアテナイ市民たちには、そういうふうに見えていたのだろう。つまり、ソクラテスという人物は、当時の実用的なアテナイ市民たちから見れば、何の役にも立たないことをあれこれ好んで議論をしている、いわば「論争家」（或いは「詭弁家」）程度に思われていたのかも知れない。だからこそ、アリストパネスの『雲』という喜劇が、アテナイの市民たちにもそれなりに受け入れられたのだろう。

つまり、アリストパネスの有名な『雲』が上演された前四二三年、つまり、ソクラテスが四十六歳の時には、すでにソクラテス自身は、自然哲学者たちのような考え方からははつきりと離れていただろう。そして、ソクラテス自身の関心は、もっぱら「人間」の問題へと本格的に向かつていたことは間違いないだろう。それは、ソクラテス自身、『弁明』のなかではつきりと明言しているものである。しかし、一般の人たちには、ソクラテスを中心とした仲間たちというのは、人間や自然の問題をあれこれ好んで議論している、まさに喜劇の『雲』のような人たちに見えたとしても、何も不思議なことはいわけである。

三、徹底した「無智の自覚」

さて、一般になかなか理解されにくいことであるが、ソクラテスの「無知の自覚」というものが、どれほど徹底したものであったか、ここで、もう一度、再確認しておきたいと

思う。例えば、当時までにすでにいろいろな「考えや思想」などがあつたであろう。そして、まだ若いソクラテスなどは、知的好奇心も非常に旺盛だっただろうから、そのいろいろな「考えや思想」などに興味を持ったに違いない。しかし、そういうもののどれにも彼の「心」は、結局、満足できなかった。それでは、なぜ、満足できなかったとはつきりと言えるのか？ それは、若しも誰かの「考えや思想」などに満足していたならば、恐らく、その「考えや論理」の上に立って、ソクラテスなりの「考えや思想」が展開されていたに違いないからである。しかし、彼自身のあの徹底した「無知の自覚」というものは、半永久的に得られないことになるのである。

例えば、ソクラテスが、ある「考えや思想」に興味を持ったとしても、それが、一体、どういうものであるかを厳密に吟味して、やがて、その「考え方」を否定してしまつただろう。なぜなら、いかなる「考えや思想」でも、完全無欠の「考えや思想」など存在しないからである。必ずどこかに「矛盾や欠点」などを宿しているものである。それゆえ、ソクラテスのような強い精神は、いかに完璧そうに見える「考えや思想」でも、その「矛盾や欠点」などを素早く見つけ出してしまふ。そうなれば、当然、その「考えや思想」などにはもう満足できないことになる。ところが、当時までの数多くの傑出した人物たちは、そこまでは行けなかつた。なぜなら、彼らは、自分の考え出した「考えや思想」などに満足してしまつて、そこで眠つてしまつたからである。しかし、ソクラテスという人は、いかなる「考えや思想」にも満足できなかった。彼の強い精神が、それらを「すべて否定してしまつた」からである。つまり、ソクラテスという人は、いかなる「考えや思想」の上にも安住できなかった人である。だから、なぜ、ソクラテスは、自分の「考えや思想」をうち立てなかつたのか、と問われれば、そうではないのだ、と答えるしかない。つまり、たとえソクラテスが、彼なりの「考えや思想」をうち立てようとしても、彼の強い精神が、やがて、自分で「それを否定してしまつた」に違いないからである。

何度も繰り返し返すが、当時までの傑出した人物たちは、そこまでは行けなかつた。なぜなら、彼らは、自分が考え出した「考えや思想」の上に立って、そこで眠つてしまつたからである。しかし、ソクラテスという人は、ものを考えるということの、「どん底」まで行つた人である。それは、様々な「考えや思想」などの抛り所となつている足場（大元）の「矛盾や欠点」などを素早く見つけ出しては、それをほとんど否定して行つた。そして、ありとあらゆる立場をほとんど否定していけば、それは、まさに果てしのない「思惟活動」の「無限地獄」に深く陥るしかないだろうが、われわれのような「弱い精神」では、そのような「思惟活動」の「無限地獄」にはなかなか耐えられないものである。それゆえ、どうしてもわれわれは、何らかの「考えや論理」の上に立って、物事を考え始めてしまふ。しかし、ソクラテスという人は、その「足場（立場）」というものを限りなく否定して行つたということである。

つまり、ソクラテスという人は、ある「考えや論理」というものを土台にして、その上にソクラテスなりの豪華な「建築物」（つまり「思想」）を築き上げた人ではなかつた。むしろ全く揺るぎのない、「足場」（土台）というものを愛求して、不安定な「土台」といふものを次から次へと退けて行つた人である。そして、そのようなことを無限に繰り返していくと、一体、どこへ行くのか。それは、今までは確かなものと思われていたものもみな不確かなものとなり、もう何がなんだかさっぱり分からないような、いわば「ブラッ

ク・ホール」(超高密度天体)のなかに深く吸い込まれていくような感じになってしまおう。そして、その世界ではもうすべてのものが意味を失い、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解をして、もう何がなんだかさっぱり分からないような世界に深く陥ってしまい、もう何もかもがよく分からない、そういう永遠の「虚無の世界」のなかに深く陥ってしまうだろう。そして、ふと我に返った時に、全身に戦慄が走ることもなるわけである。ソクラテスは、間違いなく、そこまで行った。また、そこまで行かなければ、ソクラテスのような、あの徹底した「無知の自覚」というものは、決して得られないものだからである。

四、揺るぎない「足場」

さて、ソクラテスのあの徹底した「無知の自覚」というものは、決して中途半端なものではなく、たとえソクラテスが何百年も生き続けたとしても、永遠に変わることのなかっただろう徹底した「自覚」だったのである。それでは、その永遠に変わりようのない徹底した「自覚」とは、一体、どういうものだったのか? ——それは、ある中途半端な「足場」の上に立って、そこからいくら物事を真剣に考え深めても、結局は、中途半端な答えしか得られないということである。それゆえ、大事なものは、全く揺るぎのない「足場」の上に立って、物事を考え深めるということである。ところが、当時までの傑出した人物たちは、そこまでは行けなかった。なぜなら、彼らは、彼らなりの「足場」の上に立って、その人なりの「考えや思想」を生み出しては、そこで満足し、眠ってしまったからである。しかし、ソクラテスという人は、そういう何らかの「考えや論理」の上に立って、自分なりの「考えや思想」を展開するということは、まったく皆無である。そして、たとえソクラテス自身、彼なりの「考えや思想」をうち立てようと試みたとしても、やがて、彼は、自分でその「考えや思想」を否定してしまっただろう。なぜなら、ある「考えや論理」の上に立って、自分なりの「考えや思想」を展開していけば、必ず何らかの矛盾や欠点につき当たるということをはっきりと自覚していたからである。つまり、ソクラテスという人は、ある「考えや論理」の上に立って、なにか自分なりの「考えや思想」という豪華な「建築物」をうち立てることを願った人ではなく、むしろわれわれ人間がもう当然のこととして少しも疑うこともない「足場」が、実はそれほど確かなものではなく、むしろ厳密には不安定なものが極めて多く、それゆえ、その不安定な「足場」をどんどん退^{しりぞ}けて、より確かで、より揺るぎのない「足場」を愛求して、どこまでも考え深めていくということを、行なっていた人であったということである。

つまり、ソクラテスという人は、いわば「ブラック・ホール」(超高密度天体)のような人であり、それは、ある「考えや論理」の上に立って、自分の「考えや思想」を展開して、いわば「光」(「知識や思想」)などを放つような、そういう一般の「天体(恒星)」とは全く違って、むしろこの世にある様々な「考えや思想」などをどんどん受け入れ、厳密に吟味しながら、しかも、いかなる「考えや論理」の上にも立たず、ひたすら最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない「思惟活動」そのものを行なっていた「存在(人物)」であり、自分からは決して何ら

の「光」(「知識や思想」)を外に向かつて放とうとはしない存在でありながら、しかし、若しも知的好奇心の旺盛な人が彼ソクラテスに近づいて、親しく「対話(吟味)活動」を行なえば、その圧倒的な「魅力」に強く惹きつけられて、もうそこから抜け出ることができないような、そういう存在だったということになるのだろう。

ところが、当時までの傑出した人物たちは、そこまでは行けなかった。なぜなら、彼らは、自分の「考えや論理」の上に立って、眠ってしまったからである。とは言え、ソクラテスのように半永久的に「光」(「知識や思想」)というものを外に向かつて放つことがなく、もう何一つ厳密には「知らない」ということでは、これという「知識」は何も得られないことになり、具体的な進歩も向上も望めないことになる。それゆえ、どうしてもある「考えや論理」という足場の上に立って、その人なりの「考えや思想」を展開していくしかない。しかし、それを行なえば、必ず他人からその「考えや思想」についての何らかの「矛盾や欠点」などを指摘されることになる。なぜなら、完全無欠の「考えや思想」などどこにもないからである。しかし、それは、それで大事なことであり、そういうことの積み重ねによってこそ、われわれ人類の「文化や文明」(ここでは特に「学問」)は、今日まで間違いなく「前進・進歩」してきたことになるからである。

例えば、プラトンという人は、自分の書いた数多くの「著作」に対して、それほど大きな価値も重点もおかなかった人である。それは、プラトン自身、いわゆる真の「哲学(愛知学)」の何たるかを誰よりも骨身に染みてよく知っていたからである。そして、彼自身、それほど大きな価値も重点も置かなかった「著作」ではあったが、それでも、結果として、その後のわれわれ人類に及ぼした影響や知的貢献というものには、想像を絶するほどの極めて大きなものがあつたことは、まったく疑う余地はない。それゆえ、プラトンという人は、自ら「光」(「知識や思想」)を放っている極めて数多くの「天体(恒星)」の中でも、一きわ光り輝く巨大な「恒星(魂)」の一つになるのだろう。

それに比べて、この世の様々な「考えや思想」などをどんどん受け入れ、厳密に吟味しながら、しかもいかなる「考えや論理」の上にも立たず、ひたすら最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない「思惟活動」そのものを行なっている、あのまるで「ブラック・ホール」(超高密度天体)のような、自らは決して何らの「光」(「知識や思想」)を外に向かつて放とうとはしない、ソクラテスという人物こそは、数知れぬほどある「天体」のなかでも、極めて「特異な存在」であるとともに、真に恐るべき巨大な「存在(魂)」であつたということにもなるのだろう。

ところで、ソクラテスのように自ら決して何らの「光」(「知識や思想」)を外に向かつて放とうとせず、ひたすら最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない「思惟活動」そのものを行なっている人物には、一体、どういう存在理由なり価値があるのだろうか? ——というのも、ソクラテスのように自ら決して何らの「光」(「知識や思想」)を外に向かつて放とうとしないならば、そのソクラテスからは、何か具体的な「知識」を得たり、あるいは学んだりすることがまったくできないことになるからである。それでは、そういう具体的な「知識」が何一つ得られないならば、ソクラテスという存在自体に、一体、どういう「意味や価値」があるのだろうか? むしろ何の「意味も価値」もないではないかということになるだろう。なぜなら、ソクラテスからは、これという具体的な「知識」を学ぶことができないからである。

それでは、ソクラテスという人間と親しく「対話（吟味）活動」を行なうことによって、一体、何が得られるというのだろうか？——確かに、ソクラテスという人物からは、これという具体的な「知識」を学ぶことは、できないかも知れない。しかし、ソクラテスからは、もつと遙かに大事なものを学ぶことになるのである。それでは、それは、一体、何かと問われれば、それは、次のようなことになるかと思う。

例えば、ある「問題」について、若い人がソクラテスと親しく「対話（吟味）活動」を行なうという場合を考えてみたいと思う。そうすると、その人は、その「問題」について、自分は、こう思うと答えることになるが、その「答え」（考え方）は、ソクラテスによって、いろいろな角度から厳密に吟味されることになる。そして、その人自身、もうすでによく知っていると思っていたことが、実はそれほどはっきりと知ってはいなかったことに気づかされる。そこで、さらにその「問題」について、ソクラテスと親しくより真剣に「対話（吟味）活動」を積み重ねていくうちに、その人は、「自分の力」（思考能力）だけではとてもそこまで入って行けないような、より深いところまで考えを深めていくことになる。——つまり、その人は、ソクラテスの巧みな「話術（問答）」に導かれて、ある「問題」について、いろいろな角度からより厳密な「対話（吟味）活動」を一緒に行なうこととなり、その結果として、その人自身、知らず識らずのうちに、物事をより深く厳密に考え深めていくことを、まさに身を以って学び、行なっていることになるのである。

そのように、ソクラテスという人物といるいろいろな問題で親しく「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによって、その人は、物事をどのようにとらえ、そして、どのように考え深めていけばよいかという、「思考（思索）活動」そのものを学ぶことになるのである。——つまり、ソクラテスという人物から学べるのは、何か具体的な「知識」などではなく、むしろ物事をどのようにとらえ、そして、どのように考え深めていけば、いわゆる物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをとらえることができ得るかという、そういう本格的な「思考（思索）活動」そのものを学ぶことになり、そのような本格的な「思考（思索）活動」そのものを、すなわち、「自らものを考える方法やその仕方」などを、ソクラテスと親しく様々な問題で「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによって、真に鍛え上げられ、育て上げられることになるとともに、いわゆる最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも探究してやまないような本格的な「思考（思索）活動」そのものを学ぶことになり、そのような本格的な「思考（思索）活動」そのものを、真に身に付ければ、その人は、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間に育っていくことにもなるわけである。そうなれば、いろいろな具体的な「知識」などは、ソクラテスから、直接、学ばなくても、自分の力でいくらでも様々な「本物の知識」を生み出すことができ得るようになるということである。ここにこそ、ソクラテスという人物の存在理由と価値とがあるわけである。

それに加えて、例えば、人間の諸問題に関して、ある「考えや論理」の上に立って、その人なりの「考えや思想」を華やかに展開し、それで満足して眠ってしまう、ありとあらゆる知識人たちにとっては、まさに「天敵」ともいうべき存在にもなるのだろう。なぜなら、いついかなる時代の、いかなる傑出した人物であろうとも、若しもその人がその人なりの「考えや思想」などに満足し、そこで眠ってしまうような人であれば、どこにでもソクラテスの「亡霊」（魂）は現われて、その人のうち立てた「考えや思想」というものが、

果たしてどのようなものであるのか、ありとあらゆる角度から極めて厳密に「吟味(検討)」された挙げ句に、何らかの「矛盾や欠点」などを素早く見つけ出されることになるからである。しかし、若しもいかなる「矛盾や欠点」も見い出せないような文字通り「完全無欠なもの」であるとすれば、それこそは、まさにいわゆる最究極の「真実、真理、その他」などについて辿り着いたということにもなるのかも知れない。

それはともかく、ソクラテスという人物の、あの有名な「無知の自覚」というものが、どれほど徹底していたものであったか、中途半端な知識人たちにはどうしても理解できない。だから、そういう中途半端な知識人たちは、やがてその人なりの「考えや思想」を豪華にうち立てて、それでも安心して眠ってしまう。しかし、ソクラテスという人が心の底から愛し求めたものは、そういう中途半端なものなどでは決してなく、むしろ遙か彼方に存在するであろう、いわゆる最究極の「真実、真理、その他」というものだったということである。それゆえ、例えば、ソクラテスという人は、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なっていたわけだが、その時に、たとえソクラテスなりの「答え」を示したとしても、それは、まさに「時に中ず」(つまり「その時に最ものを射た答えをする」ということ)であり、それゆえ、その「答え」をそのまま最究極の「真実、真理、その他」などと考えて、もうその問題について考えることをやめてしまうのでは決してなく、何度も何度もあらゆる角度から、まさに遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない「思惟活動」そのものを、(それこそ、まさに「愛知学」≡つまり「哲学」≡そのものであるが)、ソクラテスという人は、毒杯の毒が全身にまわって死んでゆく、その瞬間までし続けることになるわけである。——それゆえ、ソクラテスこそは、まさに真の「哲学」(つまり「愛知学」)のまさに創始者であるとともに、真に優れた「哲学の実践者」でもあったということになるのである。

*

*

「イデア論」への「六段階」

「イデア論」への「六段階」

《第一段階》

晩年のソクラテスは、クセノフオンの『ソクラテスの思い出』という著作によると、「…彼は、絶えず家の外で暮した。早朝から遊歩路や道場へ出かけて行き、市場の出盛る午前中は市場におり、それからあと一日中、いつも大勢の人間が寄り集るところへ来ていた。そして大抵は談論しており、誰でも彼の話を聞いたのである。(中略)、そして、彼自身はいつも人間のことを問題とし、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、政府とは何か、統治者とは何か、その他こうした題目を論じ、そしてこれを知る者は君子人であり、知らぬ者はまさに奴隷者と呼ばれても致し方ないものと考えた。……」(一、十六)とある。

さて、プラトンは、少なくとも「二〇歳から二十八歳」の八年間、晩年のソクラテスと親しく「対話(吟味)活動」を積み重ねることによって、ソクラテスのいわゆる「哲学的問答法」というものを自然と身を以って学ぶことになったであろう。しかも、「二〇歳から二十八歳」という最も知的好奇心の旺盛な、最も影響を受けやすい、まさに人間としてでき上がるうとして、より質の高い「知的食料」にもう飢えに飢えていたであろう時期(「人間形成期」の後半期)に、当時アテナイ随一ともいえるべき「最良の知性」を持った晩年のソクラテスとめぐり逢えば、若いプラトンは、そこで交わされる「人間の諸問題」に関する実に様々な「対話(吟味)活動」の内容(その数多くの生命を宿した言葉)をものすごい勢いで「吸収し」ながら、若いプラトンは、自分でも驚くほどどんな「内的成長」していくのが、はつきりと自覚できたに違いない。それは、言葉を換えれば、若いプラトンは、晩年のソクラテスから「決定的な影響」を受けたということである。

やがて、師ソクラテスの刑死から数年後、プラトンは、数多くの「初期著作」を書き始めるわけだが、その「書き方」、つまり、「ソクラテスを主人公(或いは登場)させた数多くの著作」を書くということは、すなわち、プラトンの「頭の中」(或いは「心の中」)に「蓄え(蓄積)」されていたであろう、かなり膨大な量の「ソクラテスの言動」を、そのたびごとに「思い出」しては、その「思い出」したいろいろな「ソクラテスの言動」の意味を、新たに「理解し直す(或いは深めていく)」ということを自然と行なっていたとともに、プラトンは、長年にわたって、ソクラテスになりきって、その「内的世界」(特にソクラテスの「思惟界」)を徹底的に生きてみるということになったわけである。それは、ソクラテスという人間と可能な限り「一体」となって、そのソクラテスという人間を「内から理解する」という、人類史上ほとんど例のない真に驚くべき「人間理解方法」を採ったということである。

また、そもそもプラトンは、なぜ、自分の「考えや思想」を「自分の名前」で語らず、「ソクラテスという登場人物」に語らせるようなことをしたのだろうか? この問題は、未だに「大きな謎」として残されている。しかし、それは、「むしろ逆なのだ」と何度でも繰り返さなければならぬ。それでは、一体、「何がどう逆なのか」と言えば、それは、次のようなことである。——つまり、ソクラテスが刑死した時、プラトンは、二十八歳で

あったが、その時、プラトンは、まだ「魂の問題」についても、また、ソクラテスが人間にとつて最も「大事なことから」として考えていた「善美の問題」に対しても、そして、ソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）の何たるかも、まだ十分には理解できていなかったに違いない。

それでは、プラトンは、一体、それらの問題をどうして「わが身に感じて、実感として理解（或いは解明）でき得た」のだろうか？ それは、まさに「ソクラテスを主人公とした初期著作」を数多く書くという実際の行為によつて、つまり、プラトンは、長年にわたつて、ソクラテスになりきつて、その「内的世界」（特にソクラテスの「思惟界」）を徹底的に生きてみることによつてこそ、自ずと（或いは思いもかけないような感じ）で「見えてきたもの」であり、それが、やがて、プラトンの「イデア論」にもなつていくのだから。それは、ソクラテスの「考え方」の延長上に「見えてきたもの」であり、その逆では決してあり得ない。（つまり、プラトンには、最初から「イデア論」というものがあつて、それを作中のソクラテスに語らせたというようなことは、全くあり得ないことである。）つまり、まだ若かつたプラトンには、自分の「考えや思想」と言つた「確たるもの」があつたわけではない。むしろ数多くの「ソクラテスを主人公とした様々な著作」を書くという実際の行為の積み重ねによつてこそ、初めて、自分の「考えや思想」（つまりプラトンの「考えや思想」というものが生まれてきたと考える方が遙かに正しい。その逆は、決してあり得ないことである。——逆に言えば、もしプラトンが、いわゆる「ソクラテスを主人公とした著作」をまったく一冊も書かず、また、ソクラテスについて徹底的に考えてみるということがなかつたならば、恐らく、「見えてはこなかつた」ものに違いないのである。

《第二段階》

さて、ソクラテスには非常に有名な「無知の知」（「無知の自覚」というものがある。それは、「……自分は、知らないことは知らないと思ふ」という極めて単純なものであるが、その「真意」は、次のようなものである。——つまり、一般の人たちが安易に「知識」と呼んでいる不完全で、中途半端な「知識」ならば、自分でも少なからず持ち合わせているが、しかし、完全なる「知識」というものを持ち合わせているかと問われれば、われわれ人間の誰でも、いわば「無知」の状態にならざるを得ないだろう。

それでは、そのような完全なる「知識」というのは、一体、誰が持ち合わせているのかと問えば、それこそは、まさに全知全能的な「神」であるというのが、まさにソクラテスの基本的な「考え方」になるのである。——つまり、完全なる「知識」というのは、全知全能的な「神」だけが持ち得るのであり、われわれ人間は、たとえそれに限りなく近づくことができ得るとしても、まさに完全無欠なる「知識」というものをとらえることは、極めて難しいという「考え方」に立つのである。それが、ソクラテスのあの徹底した「無知の自覚」というものの根底にあつた「真意」になるかと思う。

だからこそ、ソクラテスは、真の「知者」は、「神」だけであり、われわれ人間は、その完全なる「知識」（つまり「真知」というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない永遠の「愛知者」であるという「考え方」が、ここから生じて来

るわけである。(そして、そのソクラテスの完全なる「知識」というものは、やがては「イデア界」の「イデア」と一つに重なり合うことにもなるのだろう。)

また、プラトンは、師ソクラテスが、「正義とは何か」、「勇気とは何か」、「美とは何か」、「善とは何か」、その他と問いつつ、実にいろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を積み重ねながらも、結局は、「行き詰まり状態」になるのは、ソクラテスという人間が求めていたものは、何か不完全で、中途半端な「知識」などでは決してなく、誰がどう考えても、まさに完全なる「知識」(つまり「真知」)というものを愛求していたからに他ならないと考えるようになるわけである。そうでなければ、ソクラテスのあの有名な「行き詰まり状態」も、また、あの徹底した「無知の自覚」というものも、まったく理解できないことになるからである。

《第三段階》

そこで、プラトンは、師ソクラテスが愛求していた、その完全なる「知識」というものをそのままそっくり受け継ぎ、そして、それを何らかの「言葉」で表現しようとして、やがて、いわゆる「ものそのもの」という言葉を使って表現するようになるわけである。――つまり、正義とは何か、という問いに対しては、「正義そのもの」をとらえることが、すなわち、「真知」であるという「考え方」である。しかし、われわれ人間には、なかなか「正義そのもの」をそのままそっくり完全なる形でとらえることは極めて難しいことであり、そのようなことが容易にできるのは、まさに全知全能的な「神」だけかも知れないが、しかし、最究極的なものとしての「正義そのもの」というものはあるはずである。もしなければ、すべては「相対的なもの」になってしまい、物事の「真実、真理、その他」などというものは、半永久的にとらえることができないことになるからである。

そこで、プラトンは、ありとあらゆる事物には、すべて最究極的な「真実、真理、その他」としての「ものそのもの」(つまり「なるもの」というものが存在するという「大前提」を立てることになるわけである。なぜなら、それこそは、まさに師ソクラテスが愛求してやまなかった完全なる「知識」(つまり「真知」)に他ならないと考えたからであるのだらう。

《第四段階》

それでは、プラトンは、なぜ、師ソクラテスの「考え方」をそのまま忠実に受け継ぎながらも、やがてその「考え方」を発展させて、いわゆる「イデア論」というものを展開しなければならなかったのか？ その大きな理由としては、まだ若かったプラトンには、なかなか理解できなかった師ソクラテスに関する「三つの難題」があったわけである。そして、そのソクラテスに関する「三つの難題」を徹底的に説明するためには、どうしても「イデア論」というものを導入することが必要不可欠になって来たということである。それでは、その「三つの難題」とは、一体、何なのか？ その一つは、まさに「魂の不死」の問題であり、そして、若しも「魂そのもの」という「単独で独立した存在」というものがあるとするれば、たとえ肉体が減びても、その減びた肉体から、いわゆる「魂」だけが抜け出

し、その抜け出した「魂」だけで、「単独で生き続けることができ得る」ことになるわけである。次に、ソクラテスが人間にとって最も「大事なことから」と考えていた「美にして善なるもの」（つまり「善美の問題」）を、いわゆる「美のイデア」や「善のイデア」という形で説明することになるわけである。そして、もう一つは、ソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）というのは、一体、何だったのか？ それは、いわゆる中途半端な「知識」などではなく、まさに完全なる「知識」（つまり「真知」）というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない本格的な「思考（思索）活動」そのものであるとともに、真の「愛知者（哲学者）」というのは、「……つねに恒常不変のあり方を保つもの（イデア）に触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない」という形で、「哲学」（或いは「哲学者」）というものを説明することになるわけである。つまり、プラトンは、『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』という中期著作のなかで、「イデア論」を用いて、ソクラテスに関する「三つの難題」を徹底的に説明して、その「三つの難題」に決着をつけることになったということである。

《第五段階》

さて、プラトンは、その『パイドン』という著作のなかで、「……つまり、純粹な美そのもの、善そのもの、大そのもの、その他、すべてそのようなものがあるという前提だ。君がこれを認め、これらのものは存在するということに同意してくれるなら、ぼくはそれらのものから出発して、かの原因を見つけだし、魂が不死であることを示すことができるだろうと思う。……」（100B）と、「こう」ことから、いわゆる「魂の不死」の「証明（説明）」を行なうことになるわけである。

そのように、プラトンは、「ものそのもの」（つまり「イデア」）というものが実在するという大前提から、「魂の不死」の問題をはじめ、「善美の問題」やソクラテスが実践していた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）とは、一体、何だったのか、という、いわゆるソクラテスに関する「三つの難題」を徹底的に「説明（説明）」をして、その「三つの難題」に決着をつけることになったということである。

そうすると、プラトンにとって、若しも「イデア論」という「大前提」（つまり「ものそのもの」が実在するという考え方）に間違いがあれば、それこそ、せっかく「説明（説明）」でき得た「三つの難題」の論理展開が、足元から音を立てて崩れていくことになるだろう。なぜなら、まさに「イデア論」というものを大前提として「論理の展開」をしているからである。そこで、プラトン自身、「イデア論」を大前提として、まさに『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』等を書き上げたあとで、非常に不安になってきて、いわゆる『パルメニデス』という著作のなかで、あるいは『ソピステス』という著作のなかで、その「イデア論」というものを徹底的に「吟味（検討）」し直してみることになるのである。

《最終段階》

プラトンの「イデア論」は、いわゆる『饗宴』や『パイドン』或いは『国家』や『パイロス』といった「中期著作」のなかで積極的に登場し、そして、『パルメニデス』や『ソピステス』などの再考を経ては、いわゆる『テイマイオス』で最終的な段階に到達しているかと思う。

つまり、プラトンは、その『テイマイオス』という著作のなかで、「……構築者（神）は、一方に、永遠にある『イデア界』をながめ、他方に、流動してやまない『形なきもの』（場・母胎）を見た時に、いわゆる『イデア界』のほうをモデルとして、絶えず流動してやまない『形なきもの』（場・母胎）の中に生じる「生成」（その材料となる「四元素」）などを用いて、いわゆる『この世（全宇宙）』を創り出した……』という「考え方」へと大きく昇華（完成）させていくわけである。

もちろん、今日では、「神」が「この世（全宇宙）」を創り出したという考え方は、もう誰も本気で信じている人などいないだろう。それでは、プラトンの「考え方」は、今日ではもう全く意味のないことになるのだろうか。もちろん、そうではない。——つまり、現代人であるわれわれは、次のように考えることによって、プラトンの「イデア論」を今日に生かすことができるのである。すなわち、われわれ人間は、当然のことながら、「不完全な存在」であり、それゆえ、その「知力や能力」などには自ずと限界がある。それゆえ、様々な事物の最究極の「真実、真理、その他」などを厳密にとらえることは、なかなかできにくい。そこで、完全無欠なる存在としての全知全能的な「神」というものを、かりに「想定」するわけである。そうすれば、その全知全能的な「神」であれば、この世の実に様々な事物の最究極の「真実、真理、その他」などをどこまでも厳密にとらえることができ、それは、すなわち、すべてが「一なるもの」からできている、まさに真善美の壮大な「イデア界」を総観している状態になるだろう。そして、全知全能的な「神」が、その「思惟界」で、すべてが「一なるもの」からできている、まさに真善美の壮大な「イデア界」を総観している状態とは、まさにわれわれ人類の最究極の「到達点」でもあり、その永遠に到達でき得ない最究極の「到達点」に向かって、われわれ人類は、無限に果てしなくどこまでも問い続けながら、その最究極の「到達点」へと少しでも近づけていこうとする、まさに永遠の「愛知者」ということになるわけである。

*

*

「無知の自覚」と「イデア論」との関係

「無知の自覚」と「イデア論」との関係について

ソクラテスには、非常に有名な「無知の自覚」というものがある。それは、一言で言えば、「知らないことは、知らないと思う」という、極めて簡単な言葉で表現でき得るものであるが、しかし、その言葉の「真意」は、決して「単純明快なもの」ではないだろう。そこで、その「問題」について考えてみたいと思うが、そもそもソクラテスが、自分は、何も知らない、何の知識もないという時、その「知識」とは、一体、どういうものになるのだろうか？ それは、完全なる「知識」は、何一つ持ち合わせてはいない、不完全で、中途半端な「知識」ならば、いろいろ知ってはいるが、完全なる「知識」というものは、何一つ知らないという「意味合い」になるのだろうか。もつと言えば、多くの人たちが「知識」と呼んでいるようなものならば、自分も少なからず知ってはいるが、しかし、いわゆる完全なる「知識」というものは、何一つ持ち合わせてはいないということである。

つまり、ソクラテスが考えている「知識」とは、あれこれの不完全で、中途半端な「知識」などではなく、まさに最究極の「真実、真理、その他」としての完全なる「知識」というものを愛求しているということである。それゆえ、われわれ人間がそのような「完全なる知識」というものを持ち合わせているかと問われれば、それは、もう誰でも「無知」の状態にならざるを得ないものである。——例えば、「正義とは何か」という問題で、いろいろな角度からお互いに「対話（議論）」を積み重ねていく過程において、「正義について」の一般的な「知識」（つまりは様々な「不完全な答え」）などは、すべてその「対話（吟味）活動」のなかで徹底的に「吟味（検討）」され尽くされてしまう。つまり、あれこれの「中途半端な知識」などであれば、ソクラテス自身も少なからず知ってはいるが、しかし、まさに最究極の完全なる「知識」というものをとらえようとすれば、どうしても「行き詰まり」状態になってしまうということである。

それでは、そのような完全なる「知識」というものは、一体、誰が持ち合わせているのかと問われれば、それこそは、まさに全知全能的な「神」であるというのが、まさにソクラテスの基本的な「考え方」になるわけである。——つまり、完全なる「知識」は、全知全能的な「神」だけが持ち得るのであり、われわれ人間は、たとえそれに限りなく近づくことができ得るとしても、完全無欠なる「知識」というものをとらえることは、極めて難しいという「考え方」に立つのである。それこそは、まさにソクラテスのあの徹底した「無知の自覚」というものの根底にあった「真意」になるかと思う。

だからこそ、ソクラテスは、真の「知者」は、「神」だけであり、われわれ人間は、その完全なる「知識」（つまり最究極の「真実、真理、その他」というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない永遠の「愛知者」であるという「考え方」が、ここから生じて来るということである。

一、真知とは

ところで、ソクラテスは、すべては「相対的なもの」であり、それゆえ、絶対的な「真実、真理、その他」などはどこにも存在しないという考え方に立っていたのだろうか？ もちろん、そうではないだろう。それでは、プロタゴラスのあの有名な『人間は万物の尺

度である』という言葉で代表される、いわゆる数多くの「ソフィスト」たちと基本的にはまったく同じ考え方になってしまっている。ソクラテスは、何よりもそのような「ソフィスト」たちと戦った人である。それゆえ、ソクラテスは、完全無欠なる「知識」（つまり最究極の「真実、真理、その他」というものは存在するけれども、それを完全なる形でとらえることができ得るのは、まさに全知全能的な「神」のみに可能なことであり、われわれ人間にはどうしても不完全な形でしかとらえることができないという考え方になるわけである。それが、すなわち、ソクラテスのあの有名な「行き詰まり」状態であるとともに、あの徹底した「無知の自覚」の「真意」になるかと思う。

つまり、ソクラテスが、「正義とは何か」、「不正とは何か」、「勇氣とは何か」、その他と問いつつ、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねながらも、結局は、「行き詰まり状態」になるのは、ソクラテスという人間が求めていたものは、何か不完全で、中途半端な「知識」などではなく、まさに完全なる「知識」というものを愛求していたからに他ならないということである。

少なくともプラトンは、そのように受けとめた。あるいは、プラトンは、そのように解釈した。そうでなければ、ソクラテスのあの有名な「行き詰まり」状態も、あの徹底した「無知の自覚」というものも、まったく理解できないことになるからである。——そこで、プラトンは、師ソクラテスが愛求していた、その完全なる「知識」というものをそのままそっくり受け継ぎ、そして、それを何らかの「言葉」で表現しようとして、やがて、いわゆる「ものそのもの」（或いは「イデア」という言葉を使って、まさに完全なる「知識」というものを表現するようになるということである。

それゆえ、プラトンにしてみれば、ソクラテスの完全なる「知識」という考え方をそのままそっくり受け継いだだけであり、何も自分の「イデア論」を語るために、ソクラテスという人間をうまく利用したとか、あるいはプラトンにはもともと「イデア論」という考え方があって、それをソクラテスという登場人物に語らせたという「考え方は、決して受け入れることのできない「考え方」なのである。なぜなら、プラトンの「頭の中」に最初から「イデア論」というものがあつたはずもなく、最初は、何よりもソクラテスという人間の「対話（吟味）活動」から生じて来る「行き詰まり」状態と、あの徹底した「無知の自覚」というものがあつただけである。そして、そのようなことになるのは、ソクラテスという人間は、一般の知識人たちは非常に違っていて、不完全で、中途半端な「知識」というものを決して「知識」とは認めず、真の「知識」と呼べるものは、ただただ完全無欠なる「知識」のみであり、そして、その完全無欠なる「知識」というものをもっと具体的にわかりやすい言葉で表現しようとするれば、それは、一体、どういうものになるだろうかと考えた時に、プラトンは、やがて、例えば、「正義」とは何か、「勇氣」とは何か、「美」とは何か、「善」とは何か、その他、そのような問いに対しては、それぞれ「正義そのもの」「勇氣そのもの」「美そのもの」「善そのもの」「善そのもの」、その他、そういう「ものそのもの」という言葉で表現して、その各々の対象の「対象そのもの」（或いは「実相」そのもの）をとらえることこそが、まさに師ソクラテスが愛求してやまなかつた完全無欠なる「知識」に他ならないと考えるようになるわけである。しかも、その「正義そのもの」「勇氣そのもの」「美そのもの」「善そのもの」、その他、そういうものは、当然のことながら、いろいろな不純物の入り混じった「多なるもの」であるはずはなく、それは、不純物のまった

く入り混じらない百パーセント純粋な「一なるもの」であり、それこそ、まさに最究極の「真実、真理、その他」ということにもなるのである。

もちろん、そのような完全なる「知識」（つまり「一なるもの」というものを観て取るということは、極めて難しいことであり、それゆえ、今日、「真実・真理」と考えられているものも、次の時代には、もう「真実・真理」ではないかも知れない。だからこそ、われわれ人間は、まさに遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない永遠の「愛知者」であるのに対して、全知全能的な「神」であれば、すべてが（一なるもの）からできている、まさに真善美の壮大な「イデア界」を「総観」することができ得るということである。それは、例えば、何千万ピースという個々のイデアからなる巨大な「ジグソーパズル」があるとして、それらすべてが秩序正しく並べ揃えられている、その壮大なる全体像を「総観」しているのが、まさに全知全能的な「神」であり、一方、われわれ人間は、少しでもその巨大な「ジグソーパズル」を完成させようと、半永久的に努力を積み重ねていく永遠の「愛知者」である、ということになるのである。

二、イデアとは

それでは、ここでもう一度、再確認しておきたいと思うが、プラトンは、師ソクラテスが実際に行なっていた、いろいろな分野の人たちとの「対話（吟味）活動」から生じてくるあの有名な「行き詰まり」状態と、その徹底した「無知の自覚」というものから、師ソクラテスが愛求してやまなかつたものは、誰がどのように考えても不完全で、中途半端な「知識」などではなく、むしろ完全なる「知識」（つまり「真知」）であることは間違いないものであると考えて、それでは、その完全なる「知識」とは、いったいどういうものだろうかと考えた末に、やがて「ものそのもの」という言葉を使って表現するようになるわけである。それは、例えば、「正義そのもの」「勇氣そのもの」「美そのもの」「善そのもの」、その他、そういう「ものそのもの」というものが存在するという「考え方」である。そして、そのようなものがあるという「大前提」から、いわゆる『饗宴』『パイドン』『国家』『パイドロス』といった「中期著作」のなかで、大々的にその「考え方」を展開させることになるわけである。それが、有名な「イデア論」ということになるかと思う。

それゆえ、プラトンは、師ソクラテスの「考え方」をそのまま忠実に受け継ぎながらも、その「考え方」を発展させて、より「体系化したもの」こそは、まさにプラトンの「イデア論」になるということである。それでは、プラトンは、なぜ、師ソクラテスの「考え方」をそのまま忠実に受け継ぎながらも、やがて、その「考え方」を発展させて、いわゆる「イデア論」というものを展開しなければならなかったのか？　ここが最も大事な要点であるが、その大きな理由の一つとしては、やはり、次のようなことがまず考えられるかと思う。

——それは、プラトンの『パイドン』という著作のなかに出てくるものであるが、「……つまり、純粋な美そのもの、善そのもの、大そのもの、その他、すべてそのようなものがあるという前提だ。君がこれを認め、これらのものは存在するということに同意してくれるなら、ぼくはそれらのものから出発して、かの原因を見つけたし、魂が不死であることを示すことができるだろうと思うのだが。……」（100B）とある。

つまり、プラトンは、いわゆる「魂の不死」というものを証明するためには、どうしても「ものそのもの」という「考え方」(つまり「イデア論」というものが、必要不可欠である)と考えるようになるわけである。そこでプラトンは、その「ものそのもの」という「考え方」(つまり「イデア論」というものを、はつきりと定義することから始めるわけである。それは、次のようなものである。「……それでは、さっきの議論で問題になった、あの『ものそのもの』にもどうだろう。われわれが質疑応答によってその存在を説明する真実在は、つねに変わららず、同一なのであるうか、それとも、変化するものなのであるうか。等しさそのもの、美そのもの、何であれ『ものそのもの』が、つまり真の実在が、たとえいかなる変化であれ、なんらかの変化をうけることがあるだろうか。それとも、これらの、それぞれの単一の形をもち、純粋に自分だけで存在する『ものそのもの』は、つねに変化せず、同一の状態にとどまって、どのような時にも、どのような点でも、どのような仕方でも、何らの変化をも受けることがないのではないか。……」(78d)とある。

三、魂の不死の立証

それでは、プラトンは、なぜ、「魂の不死」というものを敢えて「立証(証明)」しなければならなかったのか? それは言うまでもなく、師ソクラテスがあの『ソクラテスの弁明』のなかで言い遣した言葉、つまり、「……死というものに対して善き希望をもつてもらわなければなりません。そして善き人には、生きているときも、死んでもからも、悪しきことは一つもないのであって、その人は、何に取り組んでいても、神々の配慮を受けないということはないのだという、この一事を、真実のこととして、心にとめておいてもらわなければなりません。……」(41c~d)という言葉、また、ソクラテスという人間は、子供の頃から、例の「ダイモンからの合図」(つまり「神からの合図」というものを受けていたということ。また、何よりも「真実・真理」(つまり「真知」)を愛し求めて、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を積み重ねつつ、お互いの「知の状態」を厳密に吟味し合いながら、より「よく生きること」を心がけ、そして、他人から不正を受けても、自ら不正を加えることはしなかったということ、さらに、もつとうまく立ち回れば、恐らく、軽い刑にもなり得たはずであり、また、牢獄からも容易に国外に逃亡することもでき得たはずなのに、ソクラテスは、なぜか「無実の罪」を受けたまま毒杯を仰いで従容として死んで行ったということ、それらすべてを含めたソクラテスの「生き方・死に方」というものを考え合わせてみるならば、どうしても「あの世」(或いは「魂の不死」というものを「立証(証明)」しなければ、ソクラテスという人間の「生き方・死に方」というものは、まったく理解できないことになるからである。

そこで、プラトンは、何とかして「魂の不死」というものを「立証(証明)」しようとして、幾つかの「説明」を試みるわけであるが、しかし、それらの幾つかの「説明」だけでは、どうしても不十分であり、そこで、いわば「最後の切り札」的なものとして、いわゆる「ものそのもの」という「考え方」(つまり「イデア論」というものを用いて説明することにるのである。それでは、どうして「ものそのもの」という「考え方」(つまり「イデア論」というものを用いると、いわゆる「魂の不死」というものが説明でき得るのかと問われれば、それは、次のような理由からである。——つまり、われわれ人間と

いうのは、基本的には「肉体的部分」と「精神的部分（『魂』）」からできていることになるが、その場合、もし「魂そのもの」という「単独で独立した存在」というものがあるとするれば、たとえ肉体が滅びても、その滅びた肉体から「魂」だけが抜け出し、その抜け出した「魂」だけで、「単独で生き続けることができ得る」ことになるだろう。

なぜなら、プラトンの「考え方」では、「……単一の形をもち、純粹に自分だけで存在する『ものそのもの』は、つねに変化せず、同一の状態にとどまって、どのような時にも、どのような点でも、どのような仕方でも、何らの変化をも受けることがない」（78d）からである。そして、そのような方法で「魂の不死」というものを何とか「立証（証明）」した後で、作中のソクラテスは、次のような極めて大事なことを述べることになるのである。それは、シミアスというソクラテスの対話相手が、「……いや、わたし自身も、すくなくともいままで述べてこられたところからは、もう、なんら不信の点はありません。しかし、問題の重大さ、人間の無力さを思うと、これらのことがらについて、自分のなかにまだ不安の念を禁じえないのです」という言葉を受けて、ソクラテスは、「……しかし、それだけではないのだ、シミアス」、「……君の言うことが正しいのは、あの『ものそのもの』が実在するという第一前提についてもそうなのだ。たとえ、あの前提が君たちに信じられるとしても、それでもなお、もつと厳密な探究がなされなければならない。……」（『ソクラテス』107b）という、この「言葉」を受け継いで、やがて、『パルメニデス』や『ソピステス』という著作のなかでの「イデア論の再考」へと繋がっていくことになるのである。

四、真知とイデア

ところで、生前、ソクラテスは、いろいろな分野の人たちと親しく「対話（吟味）活動」を行なっていたわけだが、その場合、クセノフォンの『ソクラテスの思い出』という著作によると、「……彼自身はいつも人間のことを問題とし、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、政府とは何か、統治者とは何か、その他こうした題目を論じ、そしてこれらを知る者は君子人であり、知らぬ者はまさに奴隸者と呼ばれても致し方ないものと考えた。……」（16）とある。さて、ここで大事なことは、ソクラテスが、敬神とは何か、不正とは何か、勇氣とは何か、その他、そのような題目で「対話（吟味）活動」を積み重ねながらも、その多くの場合、あの有名な「行き詰まり」状態になってしまっているのは、ソクラテスという人間が心から愛し求めたものは、決して不完全で、中途半端な「知識」などではなく、文字通り、完全なる「知識」（つまり「真知」というものこそ、愛求していたからに違いないと、少なくともプラトンは、そのように考えかつ解釈することになるわけである。

そこで、プラトンは、師ソクラテスが愛求してやまなかったその完全なる「知識」（つまり「真知」というものを、何らかの言葉で表現しようとして、やがて「ものそのもの」という言葉で表現するようになるわけである。——つまり、敬神とは何か、という問いに対しては、「敬神そのもの」をとらえることが、すなわち、「真知」であるという「考え方」である。しかし、われわれ人間には、なかなか「敬神そのもの」をそのままそっくり完全なる形でとらえることは、極めて難しいことであり、そのようなことが容易にでき得

るのは、まさに全知全能的な「神」だけかも知れないが、しかし、最究極的なものとしての「敬神そのもの」というものはあるはずである。もしなければ、すべては「相対的なもの」になってしまい、物事の「真実、真理、その他」というものは、半永久的にとらえることはできないことになるからである。

そこで、プラトンは、ありとあらゆる事物には、すべて最究極の「真実、真理、その他」としての「ものそのもの」(つまり「イデア」)というものが存在するという「大前提」を立てるわけである。なぜなら、それこれは、まさに師ソクラテスが愛求してやまなかつた完全なる「知識」(つまり「真知」)に他ならないと考えていたからである。

五、イデア論の完成

つまり、プラトンが「イデア論」というものを導入しなければならなかった「最大の理由」の一つは、まず、いわゆる「魂の不死」というものを「立証(証明)」するためであり、そして、もう一つは、師ソクラテスが愛求してやまなかつたその完全なる「知識」というものを、何らかの言葉で表現しようとして、やがて「ものそのもの」(つまり「イデア」)という言葉で表現するようになり、それをを用いて、ソクラテスが人間にとって最も大事なことがらとして考えていた「美にして善なるもの」(つまり「善美の問題」)を、いわゆる「美のイデア」と「善のイデア」という形で「説明(解明)」することになるのである。そして、もう一つは、ソクラテスが実際に行なっていた「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」とは、一体、どういうものだったのか？ それは、いわゆる中途半端な「知識」などではなく、まさに完全なる「知識」(つまり「真知」というものを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない本格的な「思考(思索)活動」そのものであるとともに、真の「愛知者(哲学者)」とは、「……つねに恒常不変のあり方を保つもの(イデア)に触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに変転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない」という形で、「哲学」(或いは「哲学者」というものを「説明(確立)」することになるわけである。——つまり、師ソクラテスに関する「三つの難題」を徹底的に「解明(説明)」するためにこそ、いわゆる「イデア論」というものは、積極的に導入されたということである。

しかも、プラトンは、その「考え方」をさらに発展させて、ありとあらゆる事物には、すべて最究極の「真実、真理、その他」としての「ものそのもの」(つまり「イデア」というものが存在するという「大前提」から、やがて、いわゆる「叡知界」(つまり「イデア界」というものを考えるようになるわけである。そして、そのすべてが「一なるもの」からできている、まさに真善美の壮大な「イデア界」をモデルとして、「構築者(神)」は、もう一方の絶えず流動してやまない「形なきもの」(場・母胎)の中に生じる「生成」(その材料となる「四元素」)などを用いて、いわゆる「この世(全宇宙)」を創り出すことになるというのが、まさにプラトンの『テイマイオス』(つまり「宇宙論」)であり、プラトンの「イデア論」というのは、そのような最終的な「論理展開」へと「昇華」(完成)していくのである。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「世界の名著 プラトンⅠⅡ」(「中央公論社」)
- ※底本 「ギリシア喜劇Ⅰ アリストパネス(上) 雲」(「筑摩書房」)
- ※底本 「国家」上下 プラトン著・藤沢令夫訳(「岩波文庫」)
- ※底本 「ソークラテースの思い出」佐々木理訳(「岩波文庫」)
- ※底本 「パイドロス」プラトン・藤沢令夫著(「岩波文庫」)
- ※底本 「ソクラテス」田中美知太郎著(「岩波新書」)